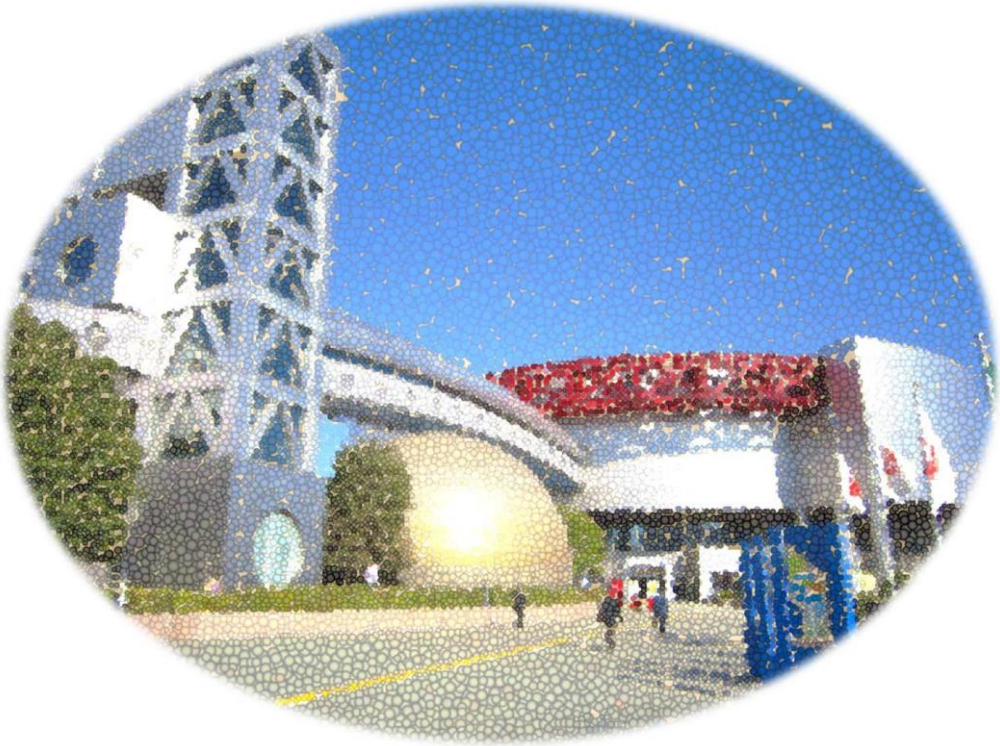
令和元年度

英語教育アドヴァンスト研修

授業改善プロジェクト 報告書

ーアクション・リサーチによる高等学校英語授業での実践研究ー



神奈川県立国際言語文化アカデミア

はじめに

神奈川県立国際言語文化アカデミア　所長
小島　誉寿

私たちは現在，人やモノが国境や海を越えて行き交うグローバル化・ボーダレス化した社会に生きています。来る東京オリンピック・パラリンピックは，そのことを私たち日本人が肌で感じる機会になるかもしれません。

国は長きにわたって「英語を使える日本人の育成」という英語教育の目標を掲げてきました。しかし，中高 6 年間英語を学んでも，それは大学受験のための知識であり，世界では通用しないと揶揄されて久しく，この間，「読む」「書く」から「話す」「聞く」を重視する方向に転化するも，それも徹底し切れず，「語彙」「文法」偏重の風潮からも脱しきれない，という英語教育の課題はいまだに残っていると思われます。

情報化社会が進展し，グローバル化がますます進む中で，外国語によるコミュニケーション能力は，これまでのように一部の業種や職種だけでなく，だれもが生涯にわたる様々な場面で必要とするもので，その早期からの育成・向上が喫緊の課題となっています。今般，小学校高学年から教科としての外国語の導入が図られるのは周知のとおりです。

また，国が指摘するように，人口減少による成熟社会を生きていくためには，個性と多様性が重視されるものと考えられるため，単に，理解し話すだけでなく，思考し判断して話す必要があり，その際に自分の考えを主張し理解を得るための表現力も重要になります。そのためには，日ごろから，探求心と行動力を養い，実践することが肝要だと考えます。

国際言語文化アカデミアでは，「国際社会で活躍できる人材の育成」を使命の一つに掲げ，県教育委員会と連携して「外国語にかかる教員研修事業」を進めていますが，その事業の柱として，平成 23 年度から，県立高校における英語教育で中核的な役割を担う英語教員の人材育成を計画的に行う「英語教育アドヴァンスト研修」を実施しています。

この研修は，教員一人ひとりが自分や生徒たちと向き合い，授業改善に向けた課題を調査・発見・整理する中で，課題解決の方策を主体的に設定し，生徒と共にこれを実践していく授業改善プロジェクトです。

さらに，その実践結果の検証については，課題解決の達成状況や，自己や生徒の変化を自身で振り返ります。研修においては，当所のコーチングスタッフが集合研修・授業訪問などを実施し，継続的な指導・助言を行いますが，教員自身が研修の主体となって積極的に新たな実践にチャレンジし，課題発見から結果検証等の一連の流れを論理的に展開し，生徒との信頼関係を深めながら協力して授業改善に取り組むことが目的となっています。

こうした実践が，教育現場にさらに広まっていくことを期待しています。

目　　次

「英語教育アドヴァンスト研修」とは　1
「教師が変わり，生徒が変わる授業」を目指してー授業改善プロジェクト　3

「聞くこと」にかかわる指導

生徒の意欲を引き出すリスニング指導の工夫　岩田　桃子　5
基礎的なリスニング力を身につけさせる指導　堀籠　康介　9

「話すこと」にかかわる指導

英文の概要と自分の意見を述べる口頭要約の指導　小川 佳那子　13
基礎的な英語で口頭説明する力を伸ばす指導　小松　駿佑　17
オーラル・サマリーを活用したスピーキング指導　池田 真由美　21
会話を継続させるスピーキング指導　田中　成美　25
「質問力」「応答力」の基礎を固めるスピーキング指導　山本　健央　29
即興的に英語でやり取りする力を高める指導　小林　峻平　33
基礎的な英語でやり取りする力を伸ばす指導　中村　圭子　37

「読むこと」にかかわる指導

より速く的確な英文読解力を育てる指導　尾崎　隆善　41
自律的な読みを促すリーディング指導の工夫　堀　　苑子　45
速読即解を目指したリーディング指導　関根 金太郎　49
プレリーディング活動による支援を工夫した読解指導　好田　寛子　53

「書くこと」にかかわる指導

まとまりのある意見文を書く力を育てる指導　加藤　大貴　57
ディベート活動を利用したライティングの指導　十川　素子　61

＊それぞれの実践レポートの内容については，言語活動の呼称などに関し，厳密な用語の統一はしていません。

英語教育アドヴァンスト研修とは

○ 英語教育アドヴァンスト研修のねらい

英語教育アドヴァンスト研修は，神奈川県で中核的役割を担う高等学校英語科の先生方に専門性の高い研修の機会を提供することを目指し，県教育委員会との連携のもと，国際言語文化アカデミアで平成23年度から開講されました。

集合研修9日（前期2日，夏季4日，後期3日），勤務校での授業研究1日（前期・後期各半日，研修スタッフ訪問）から構成される合計10日間のプログラムは，「英語教師の専門知識，英語による発信力」「授業研究，授業改善」「多文化共生，異文化コミュニケーション」を3つの大きな柱としています。

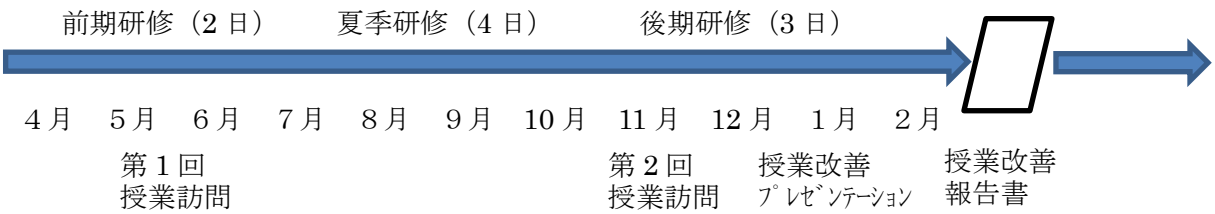
Objective 1	Objective 2	Objective 3
Expertise in English	Reflective Teaching	Multicultural Awareness
英語による発信力，および英語教育・言語習得理論の実践への活用力を磨く。	自らの授業を客観的に分析し，他教員の実践からも学びながら改善へと結びつける省察力を磨く。	英語教育において多文化共生，異文化ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝを扱うことの意義について意識を高める。

令和元年度までの9年間で，計157名の参加者が，高度な言語知識・技能およびそれらを基盤とした指導力を身につけ，仲間の教員との共同による英語教育推進に貢献すべく，県内の各学校で活躍しています。

毎年プログラム内容に修正を加えながら，英語運用能力向上の試みをはじめ，省察による授業実践力向上，多文化共生・異文化コミュニケーションへの意識高揚など，研修内容の改善と充実に取り組んできました。

○ 研修成果を活かす場としての授業改善プロジェクト

研修内容は教室でのよりよい授業実践，生徒の英語力向上へと結びつかなければなりません。しかし，教師であれば授業改善の複雑さ・難しさは身をもって経験しています。そこでアドヴァンスト研修では，集合研修において多文化共生への意識，英語力，英語教育に関する専門知識を高めながら，勤務校では継続的に授業改善に取り組むことができるように授業改善プロジェクトを取り入れています。



○ 「書く」ことによる学び

1 年間の研修を通し，研修参加者はアクション・リサーチの過程を本報告書にまとめます。日々の授業では，生徒たちの反応に対して臨機応変の判断で指導やフィードバックを調整しますが，報告書を「書く」にあたっては，時間をかけて自らの実践を振り返り，考えを整理しなければなりません。教室という 3 次元の空間で行われたことを，報告書という 2 次元の世界に理路整然とまとめるのは苦しい作業です。しかし研修参加者は，報告書の記載内容を読み返すことで，省察的実践で何を考えるかを再確認することができます。

- 自分の設定した課題は，生徒のニーズや願い，現状を十分に考慮に入れているか？
- アンケートやテストの結果に基づく分析と考察は論理的か？
- リサーチ・クエスチョンは明確で具体的なことばで表現されているか？
- 改善目標は期間内に達成可能で，目標達成に直接効果のある手だてを設定しているか？
- 生徒の変化について，量的・質的データに基づき論理的な分析と考察ができているか？
- 自分の知識，行動，気持の変化や他教員との協働への努力について振り返りができているか？
- 今回の研究を今後どう積み上げていくか，つねに先を考えているか？

「書く」ことを通じ，こうした点についてより深く考えるようになることも，アドヴァンスト研修の大きなメリットだと考えています。

○ 報告書作成の目的

本報告書の目的は 3 つあります。第一に，研修参加者が自らの授業改善の軌跡を記述しお互いの情報を共有することで今後の授業改善のための共同体づくりに役立てること。第二に，報告書の内容を他の英語科教員と共有することで，授業改善に関するアイディア創出に資すること。第三に，高等学校英語教育の課題やそれに対する現場の取組状況を公表することで，英語教育や教師教育にかかわる研究者の今後の研究に資することです。

お読みになる際は，以下の本報告書作成・編集方針をご理解いただけるようお願いいたします。

授業改善プロジェクト報告書作成・編集方針

1. 授業に参加している生徒の個性や尊厳を尊重し，生徒はみなそれぞれの可能性を持っているとの認識に立つ。
2. 学校や生徒の状況について，読者に参考となる情報を個人情報の保護に留意して記述する。
3. 実践報告については，理想論にとらわれず，現状認識に根ざした課題解決の軌跡を記述する。
4. 授業改善のプロセスやストーリーが読者にわかるように記述する。
5. データ処理や分析については，統計処理を含め言語教育研究で用いられる手法を積極的に取り入れ，授業改善の手だての効果を記述する。

本研修の実施および本報告書の作成にあたっては，過去の文献や研究成果，私たち研修担当者自身がお世話になった諸先生方から多くの知見をいただいていることを申し添えます。

「教師が変わり，生徒が変わる授業」を目指してー授業改善プロジェクト

○ 授業改善プロジェクトの流れ

授業改善プロジェクトは次のような手順で進められます。

１．自分の授業スタイルの振り返り

授業で行っている個々の活動の目的と効果，活動のつながりをあらためて考えることで，英語教師としての思いと実際の指導方法の整合性を確認します。これにより，自分の授業を客観的に分析するということを体験します。

２．授業における課題の発見

現在担当している科目の１つについて，どのような課題・問題があるか，教師の思いと授業の実情にどのような食い違いがあるかなどを，思いつく限り挙げてみます。

（例）英文読解に多くの時間を費やしてしまい，生徒に自己表現をあまりさせていない。
教科書英文の読解活動には取り組むが，初見の英文に対応できる読解力が育っていない。

３．改善すべき課題の確定

上で挙げた課題のうち，改善可能で優先順位の高いものを１つまたは２つ選びます。

４．生徒の現状把握

確定した課題に関連する生徒の学習態度や英語力・技能などを，質的・数量的に調査します。

（質的データの例）生徒の英語学習に関するコメント，教師による学習観察記録

（数量的データの例）標準テストの得点，推定語彙サイズ，発話語数

５．改善目標の設定

授業改善の目的とゴールを，「リサーチ・クエスチョン」および「改善の目安（数値目標）」として明確に言語化します。

６．目標達成のための手だての決定

目標を達成するために，授業でどのような指導を行うかを決めます。その際，それぞれの指導事項や言語活動にどのような目的や効果があるのかを明らかにしておきます。

（例）プレリーディング活動を工夫すれば，興味や背景知識が活性化され，主体的に読解に取り組むようになるだろう。

７．生徒の変化の検証と教師自身の振り返り

原則的に事前の現状把握で用いたものと同じ手法で，生徒の変化・向上を検証し，改善目標が達成されたかどうかを調べます。また同時に，この一連の取組を通して「生徒の見方」「授業のデザイン」「教材の扱い方」などについて，教師自身がどのように変化したかを省察します。

８．報告

同様の課題を抱える教師仲間との情報交換，勤務校や地区での情報提供に役立てるために，レポートを作成します。ここで再度，今回の授業改善の内容・手法を振り返るとともに，今後の課題について考察します（研修最終日に英語による口頭発表も行います）。

○ “Teacher as a Researcher” の意識とスキル

「自分が教わったように教える」「目の前の教材をあるがままにこなす」「はやりの言語活動を切り貼りする」というやり方では，うまくいかないことがよくあります。教師の直観や伝統的なやり方にもよさはありますが，生徒の質的・数量的ニーズを調べ，その客観的データに基づいて，生徒とゴールを共有しながら（変化をともなう）意思決定をしていくという意識やスキルは，プロである教師の成長に不可欠であると考えます。この授業改善プロジェクトに取り組んだ先生方が，仲間を増やしながら，よりよい授業を追求するプロ集団をつくり上げていくことを期待しています。

○ これまでの 9 年間のテーマ分類

この 9 年間で受講者の先生方が取り組んできた授業改善のテーマを分類すると，次の表のようになります。平成 26 年度までは，「動機づけ・学習意欲」やスキルを支える言語知識である「語彙・文法」もテーマとして挙がっていますが，平成 27 年度からは，「『CAN-DO リスト』の形での学習到達目標」に基づいたスキルの習得を目指す授業実践の必要性を重視し，4 技能のいずれかをテーマ（＝授業のゴール）として選択することとしています。

	23 年度	24 年度	25 年度	26 年度	27 年度	28 年度	29 年度	30 年度	R1 年度
聞くこと	0	1	0	0	1	1	2	2	2
話すこと	2	1	2	7	9	4	7	3	7
読むこと	5	4	*1 4	*1 6	11	8	6	6	4
書くこと	4	4	3	3	4	2	0	4	2
動機づけ・学習意欲	6	3	1	5	－	－	－	－	－
語彙・文法	3	1	2	3	－	－	－	－	－
計	20	14	13	25	25	15	15	15	15

*1：「技能統合型」

生徒の意欲を引き出すリスニング指導の工夫

科目名	コミュニケーション英語Ⅰ	学 年	1	形 態	ＨＲ ・ 習熟度 ・ 小集団

クラスの特徴（男女比，雰囲気，進路など）

対象は２クラス 53 名（男子 17 名，女子 36 名）の生徒である。積極的に授業を受ける雰囲気は整っており，指名されれば積極的に答える生徒がほとんどである。しかし，中学校レベルの基礎的な英語力が身についていないと思われる生徒や，勉強自体に苦手意識を持っている生徒が多く，教師の発問に自発的に答える者は少数である。進路は半数が就職，半数が大学，短期大学，専門学校等への進学である。

解決すべき課題

英語に興味関心を持ち，楽しんで学習に取り組んでいる生徒が少ないように思われる。また，ふだんの授業や ALT による授業において，ゆっくりとした英語の指示であっても，日本語での補足を加えないと指示を理解できない生徒が多く，英語での説明や指示に抵抗感を示す生徒もいる。このような日常的な聞き取りをはじめとしたリスニングスキルの育成について，これまで十分な指導ができていない。

事前の現状把握（アンケート，テストの結果など）

・第１回リスニングテスト（５月実施：受験者数 53 名）

英検３級リスニングテスト第２部（会話の内容一致選択 10 問）を使い会話を聞き取る力を調べた。

平均点	標準偏差	6 割以上正解	5 割以上正解
4.4 点	2.05	15 人(28.3%)	23 人(43.4%)

＜分析と考察＞

１問１点とした平均点は 4.4 点であった。合格点の 6 割以上正解した生徒は 15 人で，全体の 28.3% であった。テストに際し，途中であきらめたり，じっとしていられず体を動かしたり，集中できない様子の生徒が多く見られた。授業改善のポイントとして，集中を持続させることが必要だと感じた。

・第１回アンケート調査（５月実施：回答者数 53 名）

１．あなたは英語の学習が好きですか，嫌いですか。

好き	どちらかといえば好き	どちらかといえば嫌い	嫌い
4 人(7.5%)	10 人(18.9%)	24 人(45.3%)	15 人(28.3%)

２．あなたは英語が得意だと思いますか，苦手だと思いますか？

得意	どちらかといえば得意	どちらかといえば苦手	苦手
2 人(3.8%)	8 人(15.1%)	12 人(22.6%)	31 人(58.5%)

３．この授業で英語力を高めたい理由は何ですか（3 つまで選択可）。

英語が好きだから	進学に活かしたいから	就職に活かしたいから	いい成績が取りたいから	特になし	その他
17 人(32.1%)	13 人(24.5%)	19 人(35.8%)	37 人(69.8%)	5 人(9.4%)	4 人(7.5%)

４．授業中，指示や質問などを英語でされることに抵抗感がありますか。

ない	どちらかといえばない	どちらかといえばある	ある
6 人(11.3%)	21 人(39.6%)	17 人(32.1%)	7 人(13.2%)

５．教師が英語（指示や質問）を話したときに，どれくらい理解できていると思いますか。

ほぼ全部できている	まあまあできている	あまりできていない	できていない
5 人(9.4%)	29 人(54.7%)	14 人(26.4%)	2 人(3.8%)

６．この授業でどのような知識や力を伸ばしたいですか？（3 つまで回答可）

聞く力	話す力	読む力	書く力	語彙の知識	文法の知識
28 人(52.8%)	29 人(54.7%)	27 人(50.9%)	24 人(45.3%)	16 人(30.2%)	18 人(34.0%)

＜分析と考察＞

英語が（どちらかといえば）嫌いと答えた生徒が 73.6%，英語が（どちらかといえば）苦手だと答えた生徒が 81.1%であり，英語に否定的な気持ちを抱えている生徒が多い。また，授業の目的として約 7 割の生徒が「いい成績が取りたい」をということを挙げており，「好き」「楽しい」という気持ちではなく，義務感で学習に取り組んでいる生徒が多いことがうかがえる。授業中の教師の英語使用については「(どちらかといえば）抵抗感がある」と答えた生徒は 45.3%であり，英語でされた指示や質問を（あまり）理解できていないと答えた生徒は 30.2%であった。それぞれ半数以下の数字ではあるが，解決すべき課題である。なお，伸ばしたい４技能および語彙・文法学習のなかで，多くの生徒が挙げたのは，話す力(54.7%)，聞く力(52.8%)であった。言語学習の優先順位の観点からも，まず聞く力がその基礎となると考え，聞く力を伸ばすことを目標とした。

リサーチ・クエスチョン

英語を聞くことに対する抵抗感をなくし，基礎的な英語で話される日常的な対話を聞いて理解できるようになるには，どのような指導をすればよいか。

改善の目安:・英検３級レベルのリスニングテストで得点率 6 割以上の生徒が全体の 7 割以上になる。
・アンケートで「英語を聞くことに抵抗感がない」という生徒が全体の 7 割以上になる。
・アンケートで「英語を聞くことに自信がついた」という生徒が全体の 7 割以上になる。

改善のための手だて

○ 動画を使ったリスニングタスクを継続的に行えば，話の概要や状況の把握がしやすく，集中力も持続させながら，基礎的な会話表現を聞き取ることができるようになるだろう。

・*English My Way*（BBC Learning English が提供する映像教材で，バスや郵便局での会話など，日常的な場面がトピックになっている）を使用したリスニングタスクに取り組ませる。

・聴解後にスクリプトを与えてスピーキングタスクに取り組ませ，表現の確認をする。

○ 明示的な音声指導を行い，練習させれば，英語特有の音に慣れ，リスニングがしやすくなるだろう。
・音変化，強弱などについて，*English My Way* の聴解後や教科書を使った学習時に，指導・練習を行う。

生徒の変化（途中経過，事後の検証結果など）

・第２回リスニングテスト（１２月実施：受験者数 53 名）

英検３級のリスニングテスト第２部（会話の内容一致選択 10 問）を使って，会話を聞き取る力を調べ，第１回の結果と比較した。

	平均点	標準偏差	6 割以上正解	5 割以上正解
第１回	4.38 点	2.05	15 人(28.3%)	23 人(43.4%)
第２回	5.06 点	1.57	20 人(37.7%)	35 人(66.0%)

＜分析と考察＞

合格点となる 6 割以上正解した生徒は，第１回と比べると約 10%増の 20 人になったが，改善の目安とした 7 割には届かなかった。しかし，5 割以上正解した生徒で見ると，第２回では 35 人(66.0%)になり，第１回から約 23%増えている。目標には届かなかったものの，少なからず改善があった言えるだろう。2回の結果を検定にかけたところ統計学的な有意差も認められた（t検定：$p = 0.02 < 0.05$）。

・第２回アンケート調査（１２月：回答者数 53 名）

１．授業中，指示や質問などを英語でされることに抵抗感がありますか。

	ない	どちらかといえばない	どちらかといえばある	ある
第１回	6 人(11.3%)	21 人(39.6%)	17 人(32.1%)	7 人(13.2%)
第２回	11 人(20.8%)	17 人(32.1%)	17 人(32.1%)	6 人(11.3%)

２．教師が英語（指示や質問）を話したときに，どれくらい理解できていると思いますか。

	ほぼ全部できている	まあまあできている	あまりできていない	ほとんどできていない
第１回	5 人(9.4%)	29 人(54.7%)	14 人(26.4%)	2 人(3.8%)
第２回	3 人(5.7%)	32 人(60.4%)	15 人(28.3%)	1 人(1.9%)

３．英語を聞く力は伸びたと思いますか？

そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらかといえば そう思わない	そう思わない
2 人(3.8%)	29 人(54.7%)	20 人(37.7%)	2 人(3.8%)

４．英語を聞くことについて自信がついたと思いますか？

そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらかといえば そう思わない	そう思わない
2 人(3.8%)	24 人(45.3%)	24 人(45.3%)	3 人(5.7%)

＜分析と考察＞

「英語を聞くことに抵抗感が（どちらかといえば）ない」と答えた生徒は 52.9%になり，第１回から微増するにとどまった。教師が使う英語への理解度についても，「できている」とした生徒は微増している。「英語を聞く力が（どちらかといえば）伸びた」「聞くことにについて（どちらかといえば）自信がついた」という生徒はそれぞれ 58.5%，49.1%であった。改善の目安としていた「抵抗感」「自

信」の項目のいずれにおいても目標の 7 割には届かなかった。回答の理由として，「速くてついていけない」「難しい単語が増えた」「理解するまでに時間がかかる」などが見られた。新たに学んだ表現に習熟させるための練習時間が足りなかったと考えられる。一方で，英語を聞く力が（どちらかといえば）伸びたと思うと答えた生徒が 6 割近くになったことは一つの成果であると思う。この項目の回答理由のなかには，「重要な単語さえ聞き取れれば理解はできると思った」というものもあり，リスニングストラテジーが少し身についてきた生徒がいることがうかがえた。また，「(このリスニングの活動で）学習した単語を別の教材で見かけたときに識別できた」「先生の話を書きとれるようになった」というコメントもあり，リスニングにとどまらない波及効果が見られた。映像を使ったリスニングの学習については，「映像のおかげでわかりやすかった」「物語調になっているので面白い。日常会話が学べてよかった」「いろいろななまりがあることを知った。なまりも勉強したい」などのコメントが見られた。映像がリスニングの支援として効果的であり，生徒の注意力や関心を高めることにも有効であったことがわかる。総じて，これまでのこの学習方法に反復練習の時間を追加しながら引き続き行うことで，よりリスニングに慣れさせることにさらなる効果が見込めると感じた。

教師の変化

授業の目標や活動の目的を意識するようになったことで，教材研究の視点が変わった。一つひとつの発問や活動の効果を意識したり，生徒に教材を身近に感じてもらうためのアプローチの方法を探ったりすることで，教材研究がより広く，深くなったと思う。

今後の課題（次の改善点など）

今回のリスニング指導は，初期の計画より定期的・継続的に行えず十分な時間が割けなかった。このリスニング活動は私の担当クラスのみで行ったため，他クラスと進度を合わせるためにやむを得ず計画変更を行ったことが，その理由の一つである。他の担当者と連携を図り，同じ目標を共有できるよう話し合い，協力する環境をつくることの大切さを感じた。また，日々の授業活動の効果について自信を持てないままに授業を行っていた場面もあった。今後は，また「これを学んでほしい」というメッセージを意識し，自信と責任感を持って英語の指導と自己研さんを続けていきたい。

まとめ・感想

アクション・リサーチを行い授業改善に取り組めたことは，非常に大きな経験となった。たとえ，さまざまな指導方法を知っていたとしても，自らの環境に適応させて実践することは，一人ではできなかったことだと思う。テストやアンケートで生徒の実態や気持ちを把握することで，これまで自分が感覚や思い込みを頼りに，必要以上の不安を抱えながら授業を行っていたことがわかった。分析と考察を行えば，客観的な視点で一つひとつの学習活動に目標と目的を持ちながら指導を行えることが，1 年間の研究を通して初めて体感できた。さまざまな価値観やニーズを持った生徒と学びの場を作るにあたっては，英語を通してこのような人間を育てたいという教師個人の理想は追求しがたいと感じるときがある。それでも，どうすれば生徒が輝く授業ができるかと考えている時間が，一番楽しい時間であると再認識することができた。今後もここで学んだことを大切に，生徒と，周りの先生方とつながりながら，よい授業をできるよう努めていきたい。

基礎的なリスニング力を身につけさせる指導

科目名	コミュニケーション英語Ⅰ	学 年	1	形 態	ＨＲ ・ 習熟度 ・ 小集団

クラスの特徴（男女比，雰囲気，進路など）

対象は１クラス 29 名（男子 18 名，女子 11 名）の生徒である。英語を苦手としている生徒が多く，特に語彙・文法に課題がある。なかには非常に高い語彙力を持った外国籍の生徒も数人おり，総じてクラス内の英語力の差が大きい。推薦入学での大学進学を希望している者が３割ほどで，他の多くが専門学校や就職を目指している。授業への取組はよく，真面目だが，作業が極端に遅い生徒，話すことが苦手な生徒がいる。そのため，特にペアワークなどの活動では，教師の配慮や支援が必要な場合が多い。

解決すべき課題

「英語を聞けるようになりたい」「英語を話せるようになりたい」という生徒が多いため，簡単な英語によるコミュニケーションスキルを身につけさせたい。しかし，不規則動詞の意味や変化形のテストで正答率が半分に満たないなど，中学校レベルの語彙が習得できていない。身近で基本的な語彙の習得と基礎的な聞く力を身につけさせ，話す力の向上につなげていきたい。

事前の現状把握（アンケート，テストの結果など）

・第１回リスニングテストの結果（５月実施：受験者数 29 人）

簡単な対話や説明を聞いて，内容を理解する力がどれくらい身についているのかを調べるために，英検３級のリスニング問題（第１部～第３部）30 問を出題した（30点満点）。

平均点	標準偏差	最高点	最低点	6 割以上正解	10 点以下
13.48 点	4.95	28 点	3 点	4 人(13.8%)	6 人(20.7%)

＜分析と考察＞

1 問 1 点とした平均点は 13.48 点であった。合格点となる 6 割以上（18 点以上）正解した生徒は 4 人で，全体の 13.79%であり，8 割以上の生徒が合格点レベルに達していないことがわかった。また，6 人の生徒が 10 点以下と非常に低い点数であった。

・英語学習に関するアンケート（５月実施：回答者数 29 人）

１．あなたは英語が得意だと思いますか，苦手だと思いますか。

得意	どちらかといえば 得意	どちらかといえば 苦手	苦手
2 人(6.9%)	7 人(24.1%)	7 人(24.1%)	13 人(44.8%)

２．ペアで行う活動は好きですか。

好き	どちらかといえば 好き	どちらかといえば 嫌い	嫌い
13 人(44.8%)	14 人(48.3%)	0 人(0.0%)	2 人(6.9%)

３．授業でどのような知識や力を伸ばしたいですか（3 つまで選択可)。

聞く力	話す力	読む力	書く力	語彙の知識	文法の知識
18 人(62.1%)	20 人(69.0%)	11 人(37.9%)	11 人(37.9%)	6 人(20.7%)	12 人(41.4%)

４．どんなことを聞き取れるようになりたいですか（2 つまで選択可)。

交通機関等の 簡単なアナウンス	日常会話での 相手の会話	作業や行動のため の手順や指示	テレビドラマや 映画のセリフ	ニュースや議論
10 人(34.5%)	19 人(65.5%)	5 人(17.2%)	16 人(55.2%)	1 人(3.4%)

＜分析と考察＞

アンケートの結果，7 割近くの生徒が英語を苦手としていることがわかった。伸ばしたい力は「聞く力」と「話す力」がそれぞれ半分以上と多く，聞き取れるようになりたい事柄では，身近なことや自分の興味に関することが多かった。また，ペアワークを好きと答える生徒が多く，ペアで活動を行いながら，基礎的な知識を身につけ，音声指導を行うことが有効だと考えた。

リサーチ・クエスチョン

簡単な英語で話される説明や会話を聞いて，内容を的確に理解することができるようになるには，どのような指導をすればよいか。

改善の目安：・英検３級リスニング問題を 6 割以上正答できる生徒が，全体の 7 割以上になる。
・アンケートで「英語が聞き取れるようになった」と答える生徒が，全体の 8 割以上になる。

改善のための手だて

○ 明示的な音声指導を行えば，リスニングスキルを高めることに役立つだろう。
・音のつながりや音変化を意識し，単語の意味の確認と発話をやった後に練習問題に取り組む。
・リピーティングやシャドーイングを行い，音声面のトレーニングを行う。

○ 教科書の内容に関連したリスニングタスクに継続的に取り組ませれば，概要や要点の聞き取りができるようになるだろう。
・英語によるオーラルイントロダクションを行い，正確に聞き取るためのタスクを与える。
・ポストリーディング活動として，教科書の内容に関連したリスニング教材を使用して，要点の聞き取りを行う。

生徒の変化（途中経過，事後の検証結果など）

・第２回／第３回リスニングテストの結果（７月実施：受験者数 28 ／１２月実施：受験者数 29）

５月と同様に英検３級のリスニング問題（第１部～３部）30 問を使って聞く力の測定を行い，３回の結果を比較した。

	受験者数	平均点	標準偏差	最高点	最低点	6 割以上正解	10 点以下
第１回	29 人	13.48 点	4.95	28 点	3 点	4 人(13.8%)	6 人(20.9%)
第２回	28 人	14.07 点	6.61	29 点	5 点	8 人(28.6%)	10 人(35.7%)
第３回	29 人	14.52 点	6.34	29 点	6 点	8 人(27.6%)	9 人(31.0%)

	第１部	第２部	第３部
第１回	4.55 点	4.38 点	4.55 点
第２回	5.32 点	4.57 点	4.18 点
第３回	5.48 点	4.45 点	4.59 点

＜分析と考察＞

最終測定でも目標には届かず，正答率 6 割(18 点)以上の生徒は 8 人(27.6%)に留まった。平均点は微増したが，初回と第３回のデータについて Wilcoxon の符号付き順位検定を実施したところ，有意差は認められなかった（$p = 0.19 > 0.05$）。しかし，10 点以下の生徒が増えているのに対して，平均点が上がっていることから，一定数の生徒の聞く力が上がったと考え，問題タイプ別の推移を見た。第２部，第３部の平均点はほぼ変わらない反面，第１部が向上していることがわかった。第２部，３部が改善しなかった理由として，テストの後半まで集中力が続かなかったことが考えられる。また，定期試験やふだんの授業の様子から，6 割以上になった生徒は，基本的な語彙力のある生徒で，10 点以下の生徒は基本的な語彙力が乏しい生徒が多かったことから，聞く力の向上に語彙力の向上が必要であると再認識した。

・英語学習に関するアンケート（１２月実施：回答者数 29）

１．聞く力は前より身についたと思いますか。

そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらかといえば そう思わない	そう思わない
12 人(41.4%)	13 人(44.8%)	3 人(10.3%)	1 人(3.4%)

２．この授業で英語を聞く力が伸びると思いますか。

そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらかといえば そう思わない	そう思わない
12 人(41.4%)	14 人(48.3%)	2 人(6.9%)	1 人(3.4%)

３．英検３級のリスニング問題をやってみて，何が難しかったですか（2 つまで）

概要の聞き取り	要点や詳細の聞き取り	文法	単語	集中力	その他
11 人(37.9%)	12 人(41.4%)	7 人(24.1%)	10 人(34.5%)	12 人(41.4%)	0 人(0.0%)

＜分析と考察＞

聞く力が身についたかという質問に対して,「(どちらかといえば) そう思う」と答えた生徒は 86.2%で，目標の 8 割を超えたことから，生徒は活動の効果を実感しているようだ。生徒からは，「聞いて発音したり，考えたりすることを何回もやることによって身についた」「(似ている語の）音の違いなども少しはわかるようになった」というようなコメントがあった。聞き取りテストで難しかったこととして「要点や詳細の聞き取り」と同数で「集中力」を挙げた生徒が最も多く，30 分というテスト時間に対して集中しきれなかったことが考えられる。9 割近くの生徒が，聞く力の向上のための授業の効果を実感してくれていたことは，大きな改善の成果だと思う。

教師の変化

毎授業ごとに行った振り返りシートを通して，生徒がつまずいている箇所，理解できたポイントなどが明確になり，授業の改善につながった。授業のなかで行うさまざまな活動で，聞く力を高めることをつねに考えるようになり，ひとつの大きな目標を明確に示して授業を行うことができた。目標を共有することで，生徒も活動の目的などを理解し，充実感を持って授業に臨めるということを実感できた。

今後の課題（次の改善点など）

・テストでは，生徒の集中力が持続しなかったため，集中して聞く力をつける手だてが必要である。また，問題数を少なくし，テスト時間を短くするなど，検証のしかたを工夫する必要がある。
・基本的な語彙力などの基礎的な知識を習得させることが必要である。中学校での既習事項の復習や振り返りを重点的に行う必要がある。

まとめ・感想

アクション・リサーチを行うにあたって，生徒のニーズや能力を数値化して具体的に把握することで，明確な目標を設定し，それを生徒に示しながら授業を行うことができた。生徒の様子を見ながら，形成的評価をし，実情に合わせて新たな活動を行ったり，適切な教材を与えたりすることで，生徒も素直に応えてくれた。生徒自身も進歩を感じられるコメントがあったが，テスト結果が目標に届かなかったのが残念であった。今後さらなる改善を試みたい。今回この研修に参加させていただき，特に生徒理解の重要性を感じた。当初分析した以上に生徒の知識がなかったり，逆に思った以上に意欲が高かったりすることがあり，つねに評価・分析しながら授業改善することが重要だと感じた。他の先生方の意見やアイディアをいただき，それらをどう活かすかを考え，実践することは貴重な経験であった。引き続き，自分自身もつねに学びながら，英語教師としての資質・能力の向上を目指していきたい。

英文の概要と自分の意見を述べる口頭要約の指導

科目名	コミュニケーション英語Ⅲ	学 年	3	形 態	ＨＲ ・ 習熟度 ・ 小集団

クラスの特徴（男女比，雰囲気，進路など）

対象は 2 クラス 72 名（男子 31 名，女子 41 名）の生徒である。英語については苦手意識を持っている生徒もいるが，ペアワークやグループワークにも積極的に取り組んでいる。しかし，家庭での学習時間が少ないため基礎的な文法知識や語彙が十分に身についていない生徒も多い。進路については AO 入試や指定校推薦で進学する生徒が半数以上を占めている。

解決すべき課題

・話すことについて，簡単な英語の質問に英語で答えることができなかったり，非常に時間がかかったりする。
・学習したことを使って表現活動をさせることで，英語を使えるという実感を持たせたい。

事前の現状把握（アンケート，テストの結果など）

・第 1 回アンケート（7 月実施：回答者数 64）

１．英語の授業でどのような力を最も身につけたいと考えていますか？

読む力	話す力	聞く力	書く力
22 人（34.4%）	20 人（31.3%）	8 人（12.5%）	14 人（21.9%）

２．英語に話すことについて抵抗はありますか？　＊1 名無回答

むしろ話したい	抵抗はない	どちらかといえば抵抗がある	とても抵抗がある
7 人（10.9%）	14 人（21.9%）	26 人（40.6%）	16 人（25.0%）

３．授業以外で英語を聞いたり話したりすることはありますか？

ある	ない
13 人（20.3%）	51 人（79.7%）

＜分析と考察＞

アンケート調査から，34.4%の生徒は英語の授業を通じて読む力を身につけたいと考えていることがわかった。次いで，話す力を身につけたいと考えている生徒が 31.3%いた。英語を話すことに抵抗がある，もしくはどちらかといえばあると答えた生徒は全体の 65.6%にのぼった。そこで，読むこと

の指導については継続して力を入れながら，生徒が身につけたいと思っているものの苦手意識の高いスピーキング力を向上させるために今回のリサーチを行うこととした。

リサーチ・クエスチョン

読んだ内容について英語で意見や考えを言えるようにするには，どのような指導をすればよいか。
改善の目安：・スピーキングテストのルーブリック評価で各項目 B 以上の生徒が 70%以上になる。
・アンケートで「話す力が身についてきた」と答える生徒が全体の 70%以上になる。

改善のための手だて

○ 授業の導入時に簡単な英語による Q&A を行えば，英語で会話することに慣れるだろう。
・ペアで本文のトピックについて簡単な会話活動を行う。
・S＋V を意識した発話を促す。

○ 読んだ英文の要約活動において，要点や筆者の主張を簡潔に述べる練習をすれば，より的確な要約ができるようになるだろう。
・本文の概要を写真やイラストを用いて英語で説明する活動を行う。
・要約をするために，以下のような会話のフレームを与えることで，自分なりに要点や筆者の主張をまとめやすくする。（例）I read a passage about ...　／It said that.... and ...

○ 要点や筆者の主張について，推論発問を与えれば，英文の内容について意見を述べることに慣れるだろう。
・本文の理解を進めるなかで，推論発問をすることでトピックへの興味関心を促す。
・トピックに適した質問をくり返ししたり，会話のフレームを与えたりして，無理なく意見をまとめられるようにする。（例）I think this topic is very important because ... ／For example, ...

＜スピーキングテストのルーブリック＞

	内容	意見	流暢さ
A	情報が正しく伝えられており文法的な間違いもほとんどない。	自分の意見を理由や例などを添えて伝えることができている。	抑揚をつけ,すらすらと話すことができている。
B	情報は正しく伝えられているが理解に支障のない文法的な間違いが複数見られる。	自分の意見をS＋Vのある文で伝えることができている。	沈黙やいい直しをせず話すむことができている。
C	単語やフレーズを並べただけで情報が正しく伝えられていない。	自分の意見を, 意味を成す文で伝えることができていない。	沈黙や言い直しが多く, 理解に支障をきたしている。

生徒の変化（途中経過，事後の検証結果など）

・スピーキングテストの結果

１０月（受験者数：69）

	内容	意見	態度
A	24 人（34.8%）	17 人（24.6%）	15 人（21.7%）
B	43 人（62.3%）	35 人（50.7%）	52 人（75.4%）
C	2 人（ 2.9%）	17 人（24.6%）	2 人（ 2.9%）

１２月（受験者数：66）

	内容	意見	態度
A	11 人（16.7%）	11 人（16.7%）	11 人（16.7%）
B	52 人（78.8%）	51 人（77.3%）	52 人（78.8%）
C	3 人（ 4.5%）	4 人（ 6.1%）	3 人（ 4.5%）

・第２回授業アンケート（１月：回答数 67 人）

英語で話す力が身についてきたと感じますか？

とても感じる	ある程度感じる	あまり感じない	感じない
7 人（10.4%）	19 人（28.4%）	33 人（49.3%）	8 人（11.9%）

＜分析と考察＞

会話活動については，主にレッスンの導入時とスピーキングテストの前にペアでの話し合いをさせていた。はじめはなかなか発話ができない生徒もいたが，写真やイラストを使いながら会話をしたり，活発にペアで話し合ったりする様子が見られるようになった。

スピーキングテストについては今回対象とした 2 回のスピーキングテストの前に７月にもスピーキングテストをしたが，文で話すことが難しい生徒が多かったため，ある程度のフレームを与えて，文の形での発話を促した。その結果，B 評価以上の生徒はどの項目でも 70%を超え，目標を達成することができた。しかし，英語で話す力が身についてきたと感じる生徒は 38.8%であった。これはフレームを与えることで，生徒自身が考えて話すパートが減ったためだと考えている。生徒が話せるという実感を得るには，十分な指導ができていなかった。「意見」の項目で１０月時点では自分の意見の裏づけとなる根拠を示せていない生徒も多かったが，１２月では根拠を示して自分の意見を述べることができた生徒が多かった。年間を通じてスピーキングを意識して授業構成を考えてきたが，英語で話す力が身についてきたと考えている生徒は，目標としていた 70%には届かない結果となった。

教師の変化

・今までもペアワークやグループワークを行っていたが，それぞれの活動に明確な意味や目的を持たせるなど，以前よりも計画的に授業の構成を考えるようになった。

・今まではテキストの題材に沿って概要やポイントを整理することに注力しがちであったが，スピーキング活動につながるようにテキストの原典や関連資料も見ながら授業準備をするようになった。

今後の課題（次の改善点など）

・生徒同士でスピーキングの活動をするときは，キーワードをメモしながら相手の意見を聞き取るように指導していたが，相手の言っていることを正しく理解できていた生徒は少ないように思われた。今後は，相手に伝わりやすい発話の工夫や，相手の発話に対する質問のしかた，コミュニケーション方略などの指導も，活動と並行して行っていきたい。
・生徒にはスピーキングテストの内容について暗唱することは求めていなかったが，準備したことを話すことに集中するあまり暗記テストのようになってしまったと感じられたので，今後は「即興でのスピーキング」ということを主眼に置いた活動も行っていきたい。
・「意見」の項目では，生徒が話した内容に応じて Q&A を行ったが，準備していない応答を即興で話すのが難しい生徒も多くいた。今後は，短めの会話活動のなかで，相手とのやり取りに応じて発話できるよう継続的に指導し，Q&A でのパフォーマンスも評価対象に加えていきたい。
・ゴール設定が甘く，フレームを与えたことで B 評価になる生徒が多くなったので，目標設定，評価方法と，それに至る指導のプロセスについてより綿密に考え直す必要がある。
・到達目標に基づいた段階的で継続的な指導ができるよう，同じ科目を担当する教師全員で活動の共有を図りたい。

まとめ・感想

今回研修に参加するなかで，さまざまな指導法や言語活動について学び，それらを少しずつではあるが授業に取り入れることで，以前より生徒が主体的に考えて学ぶ授業になってきたと思う。しかし，設定した改善目標には届かず，生徒に十分な力を身につけさせることができなかった。生徒はスピーキング活動について，英語で話す努力をしてくれたが，授業のなかで英語を話す時間が十分に確保できていなかったことや，３年次までに段階的な指導ができていなかったということもあり，研究期間内に十分な能力の伸長を実現できなかった。

今後は，「英語は苦手だけれど話せるようになりたい」という生徒の気持ちに応えるべく，１年次から段階的に生徒の実状に合わせたゴールを設定し，同じ科目を教えている教師間での連携をとって継続的に授業改善に取り組んでいきたい。最後に，毎回新しい知識を学べる刺激的な研修の場を提供してくれたアカデミアの先生方と受講者の先生方に感謝を申し上げたい。

授業改善にあたって参考にした資料等

長尾和夫・トーマス・マーティン. (2016).『見たものを全部英語で言うトレーニングブック』
　　秀和システム
上智大学 CLT プロジェクト編. (2014).『コミュニカティブな英語教育を考える』アルク

基礎的な英語で口頭説明する力を伸ばす指導

科目名	コミュニケーション英語Ⅱ	学 年	2	形 態	ＨＲ ・ 習熟度 ・ 小集団

クラスの特徴（男女比，雰囲気，進路など）

対象は 3 クラス 119 名（男子 57 名，女子 62 名）の生徒である。クラスによって授業の取組状況には差があるが，全体的に中学校レベルの英語の基礎力が身についていない生徒が多い。約 9 割の生徒が進学を希望している。

解決すべき課題

日々の生徒と会話のなかで，「話す力を伸ばしたい」という生徒が多いと感じられるため，まず，基礎的な英語で身近なことがらを説明できる力を身につけさせたい。これまでの授業のなかで，スピーキング活動を行ってきたが，単語のみの発話で終わってしまう，内容の理解に支障をきたす誤りが多くみられるなどの課題があった。生徒が自信を持って基礎的な英語をスピーキングで使えるように指導・活動を工夫する必要がある。

事前の現状把握（アンケート，テストの結果など）

・第 1 回アンケート調査（5 月実施：回答者数 116 名）：特に伸ばしたい力／スピーキングへの意識

1．この授業でどのような知識や力を伸ばしたいとおもいますか。1～3 個選んでください。

英語を聞く力	英語を話す力	英語を読む力
46 人（39.7%）	71 人（61.2%）	49 人（42.2%）
英語を書く力	単語や熟語の知識	文法の知識
50 人（43.1%）	36 人（31.0%）	42 人（36.2%）

※無回答 2 名

2．あなたは英語を話すことが得意だと思いますか，苦手だと思いますか。

得意	どちらかといえば得意	どちらかといえば苦手	苦手
2 人（1.8%）	12 人（10.5%）	44 人（38.6%）	56 人（49.1%）

※無回答 2 名

＜分析と考察＞

「スピーキングを伸ばしたい」と答えた生徒は全体の約 61%と最も多かった。大学入試改革や英語を話すことへのあこがれが，このような高い割合に繋がっていると考えられる。一方で，英語を話すことが（どちらかといえば）得意と感じている生徒は全体の約 12%と非常に少なかった。日々の生活

のなかで英語を話す機会が少ないことが一つの要因であると思われるため，スピーキング力の向上を目標に，日々の授業のなかで基礎的な英語を話す機会を増やすことが必要であると考えた。

・第１回スピーキングテスト：（７月実施：受験者数 111 名）

テスト内容：英検準２級二次試験問題（Picture B に描かれている状況を描写する）
評価方法　：自作ルーブリックによる評価

	正確さ	内容	伝えようとする姿勢
A	コミュニケーションに支障をきたす誤り*がなく，言いたいことがスムーズに伝わる。	絵に描かれている「事象」と「原因」の両方について述べることができている。	適切な声の大きさ・スピードで，明瞭に話すことができており，強調やくり返し等，聞き手の理解を促す工夫をしている。
B	コミュニケーションに支障をきたす誤りが 1～2 個あるが，何とか言いたいことは伝わる。	絵に描かれている「事象」と「原因」のいずれかのみについて述べることができている。	適切な声の大きさ・スピードで，明瞭に話すことができている。
C	コミュニケーションに支障をきたす誤りが多く，言いたいことがあまり伝わらない。	絵に描かれている「事象」と「原因」のどちらも述べることができていない。	適切な声の大きさ・スピードで，明瞭に話すことができていない。

*コミュニケーションに支障をきたす誤り：S+V 構造の欠如，著しい語順の誤り，時制の誤りなど

結果：

	正確さ	内容	伝えようとする姿勢
A	21 人（18.9%）	31 人（27.9%）	0 人（ 0.0%）
B	43 人（38.7%）	53 人（47.7%）	82 人（73.9%）
C	47 人（42.3%）	27 人（24.3%）	29 人（26.1%）

＜分析と考察＞

「正確さ」について，約 42%の生徒がコミュニケーションに支障をきたす誤りを多くしていた。このことから，多くの生徒が自身の伝えたい内容を十分に伝えられていないことがあらためてわかった。また，「内容」では，絵から読み取ることができる「事象」と「理由」の両方に言及できた生徒が約 28%に留まった。その理由としては，「事象」と「理由」の関連性を写真から読み取ることができていないことや，伝えたい内容があるが表現方法がわからなかったということが考えられる。最後に，「伝えようとする姿勢」については，強調・くり返しなどの工夫ができている生徒が皆無であった。内容伝達が精一杯で，話し方にまで注意が向かなかったということが推察される。

<u>リサーチ・クエスチョン</u>

身近なことがらについて，即興的に文の形でわかりやすく口頭説明できる力を身につけさせるにはどのような指導をすればよいか。

改善の目安：・ルーブリック評価の各項目でB評価以上になる生徒が全体の7割以上になる。
・アンケートで「英語を話すことが（どちらかといえば）得意である」と答える生徒が全体の7割以上になる。

改善のための手だて

○ 日常的な状況について英語で説明する練習を継続すれば，状況を的確に捉え，文の形で発話する習慣が身につくだろう。
・毎回の授業で帯活動として，身近なことについて話すペアワークを実施する。
・生徒が文として言えなかったものをその授業内でフィードバックして共有する。
○ 明示的な音声指導・練習を行えば，よりわかりやすい英語で話すことができるようになり，自信が高まるだろう。
・教科書本文等を使って，強弱，音変化，イントネーションなどの指導をし，音読練習をさせる。

生徒の変化（途中経過，事後の検証結果など）

・第２回アンケート調査：スピーキングへの意識（１２月実施：回答者数111名）

１．あなたは英語を話すことが得意だと思いますか，苦手だと思いますか。

得意	どちらかといえば得意	どちらかといえば苦手	苦手
2人（ 1.8%）	16人（14.4%）	44人（39.6%）	49人（44.1%）

２．これまでの英語の授業で，以前より話す力は身についたと思いますか。

そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
6人（ 5.4%）	67人（60.4%）	25人（22.5%）	13人（11.7%）

＜分析と考察＞
英語を話すことが（どちらかといえば）得意と答えた生徒は，16.2%で，微増にとどまった（第1回：12.3%）。依然として多くの生徒が英語を話すことに対して自信を持つことができていないことがわかった。しかし，全体の65.8%の生徒が（どちらかといえば）以前より話す力が身についたと答えた。このことから，授業内の活動は生徒の意識に肯定的な効果があったと言えるだろう。

・第２回スピーキングテスト（１１月実施：受験者数115名）＊テスト内容，評価方法は第１回と同様

	正確さ	内容	伝えようとする姿勢
A	38人（33.0%）	67人（58.3%）	8人（ 7.0%）
B	59人（51.3%）	34人（29.6%）	102人（88.7%）
C	18人（15.7%）	14人（12.2%）	5人（ 4.3%）

＜分析と考察＞

3 観点すべてにおいて向上が見られ，改善の目安に達した。それぞれのデータを検定（Wilcoxon の符号付き順位検定）にかけたところ有意差が認められた（$p = 0.00 < 0.05$）。「正確さ」では，C 評価の生徒が減少して，80%以上の生徒が B 評価以上になり，A 評価の生徒も増加した。多くの生徒が SV 構造や, because を用いて状況描写することができており,「内容」の評価向上につながっている。また，授業内で継続的にスピーキング活動，音声指導を行ったことで，話すことに慣れ，伝えようとする姿勢にも注意するようになってきたと思われる。

教師の変化

今までも授業アンケートを行ったことはあったが，回答を数値化して分析したことはなかった。今回アンケート結果やテスト結果を詳細に分析することで，生徒のニーズやスキルを客観的に見ることができ，推測ではなく根拠に基づいて授業について考えることができた。また，ルーブリックを作成し，評価規準を定めることによって，継続的に一貫した指導を行うことができた。また，スピーキングに限らず，どの活動においても目標に基づいた指導を以前より意識して行うことができるようになった。

今後の課題（次の改善点など）

今回のリサーチで，生徒の技能面において一定の向上が見られた。しかし，依然として基礎的な文法の誤りや語彙力不足が多く見受けられるため，来年度以降も基礎的な練習をくり返し行い，着実な英語力の向上を図りたい。また，生徒が英語を話すことに達成感や自信を持つことができるように，活動後に，できていることについて肯定的なコメントをしたり，具体的な改善点を共有したりするなど，きめ細かい指導を続けていく必要がある。

まとめ・感想

今年度は自分の授業を見つめ直す，大きな転機となる年であった。毎回の研修で新たな知識や刺激をもらうことで，授業準備や，教材研究に対する取組が大きく変わった。特に，目標に基づく授業設計をつねに意識できるようになったことが，自分の授業に大きな影響を与えている。今回の授業改善では，「話すこと」をテーマにしたが，当初は生徒のスピーキング力を伸ばすことに不安があった。しかし，実際にやってみることで成果と課題を明確に認識することができた。さまざまなことに挑戦することを生徒に指導する立場として，まずは自ら挑戦することが，自分にとっても，生徒にとっても大切であると思う。今後も，生徒のニーズや現状を的確に把握し，目標を明確にしたうえで授業改善に努めていきたい。

授業改善にあたって参考にした資料等

佐野正之(編著). (2005).『はじめてのアクション・リサーチ 英語の授業を改善するために』大修館書店

オーラル・サマリーを活用したスピーキング指導

科目名	コミュニケーション英語Ⅱ	学 年	2	形 態	ＨＲ ・ 習熟度 ・ 小集団

クラスの特徴（男女比，雰囲気，進路など）

対象は１クラス 25 名（男子 16 名，女子９名）の生徒である。ほとんどの生徒は真面目で授業への取組は前向きであるが，内気でペア活動に取り組みたがらない生徒や学習に集中できない生徒もいる。進路に関しては４割が専門学校，３割が大学・短大進学，３割が就職を目指している状況である。

解決すべき課題

スピーキング活動をさせると，下を向いたまま原稿を読んでいる時間が長く，アイコンタクトをとらない生徒が多い。また，内気で人見知りのためか，ペア活動が困難な生徒も少なからずいる。これらのことから，聞き手に配慮しながら，わかりやすい英語で話すことに課題があると感じた。

事前の現状把握（アンケート，テストの結果など）

・英語の授業にかかわるアンケート調査（５月実施：回答者数 21）

英語が「(どちらかといえば）好き」と答えた生徒は全体の 57.1%であった。４技能のなかで「話す力を特に伸ばしたい」と答えた生徒は全体の 76.2%と最多だった。また，どのようなことを英語で話せるようになりたいかという質問では，「聞いたり読んだりしたことに対する簡単な意見や感想を話せるようになりたい」と答えた生徒が全体の 57.1%に上った。このことから，読んだ内容説明と自分の意見や感想についてのスピーキング指導をアクション・リサーチのテーマにすることにした。

・第１回スピーキングにかかわるアンケート結果（６月実施：回答者数 22）＊人数(割合)

	1. ｷｰﾜｰﾄﾞ	2. 自分のことば	3. ｱｲｺﾝﾀｸﾄ	4. ｼﾞｪｽﾁｬｰ	5. 挨拶と確認	6. 相手と協力
つねにできている	5 (22.7%)	3 (13.6%)	4 (18.2%)	4 (18.2%)	13 (59.1%)	14 (63.6%)
ときどきできている	7 (31.8%)	7 (31.8%)	7 (31.8%)	4 (18.2%)	6 (27.3%)	6 (27.3%)
あまりできていない	10 (45.5%)	9 (40.9%)	8 (36.4%)	10 (45.5%)	3 (13.6%)	2 (9.1%)
できていない	0 (0.0%)	3 (13.6%)	3 (13.6%)	4 (18.2%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)

（質問項目）１．キーワードを強調して話している。
２．暗記した表現の棒読みではなく，自分のことばとして気持ちを込めて話している。
３．発表で話すときにアイコンタクトができている。
４．ジェスチャーをつけて話している。
５．挨拶・やるべきことの確認をしてから活動をしている。
６．相手と協力し合おうと努力している。

・第１回スピーキングテスト（７月実施：評価対象 23）

内　　容：読んだ内容の説明とそれに対する意見や感想を英語で口頭発表する

評価方法：ルーブリックによる分析的評価

評価（点数）	読んだ内容の説明	意見や感想	デリバリー
A （3 点）	読んだ内容を正しく説明している。	自分の意見や感想を明確に述べている。	十分な声量で，アイコンタクトをとり，相手にわかりやすく話している。
B （2 点）	読んだ内容の説明をしているが，一部誤りがある。	自分の意見や感想を述べているが，理解しにくいところがある。	十分な声量で発表しているが，話し方がぎこちなく，たびたび沈黙する。
C （1 点）	読んだ内容の説明をしていない。	自分の意見や感想を述べていない。	声量が不十分で発表が聞き取れない。

結　　果：人数（割合）

評価	読んだ内容の説明	意見や感想	デリバリー
A	13 (56.5%)	17 (73.9%)	14 (60.9%)
B	8 (34.8%)	3 (13.0%)	7 (30.4%)
C	2 (8.7%)	3 (13.0%)	2 (8.7%)

＜分析と考察＞

６月のアンケート調査で，１～４については，「つねに／ときどきできている」と回答する生徒の割合が最大で 5 割程度であるため，改善が必要である。5，6 についてはペア活動では助け合おうという指導の成果もあり，9 割前後の生徒が「つねに／ときどきできている」と回答している。

スピーキング力の向上については 7 割以上の生徒が望んでおり，自分の意見や感想について話すことはできているが，約 4 割の生徒が読んだ内容を正しく説明できなかったり，発表でアイコンタクトがとれなかったりたびたびの沈黙があり，英文内容の理解や聞き手への配慮が不足していることがわかった。これらの力を育成し，読んだ内容説明と意見や感想をわかりやすく話すことができるようになるようにしたい。

<u>リサーチ・クエスチョン</u>

読んだ内容の説明とそれに対する意見や感想を英語で口頭発表できる力を身につけさせるには，どのような指導をしたらよいか。

改善の目安：・「読んだ内容の説明」「意見や感想」「デリバリー」を評価するルーブリックで A 評価をとる生徒が全体の 7 割以上になる。

・スピーキングにかかわる自己評価アンケートの各項目で「つねに／ときどきできている」と回答する生徒が全体の 7 割以上になる。

改善のための手だて

○ 帯活動として会話練習を継続すれば，相手にわかりやすく話す意識が高まるだろう。
・毎時間ペアで日常生活や趣味，嗜好を尋ねる質問について１分間の会話をさせる。

○ 教科書の英文について段落ごとに要約する活動を与えれば，より明確に要点が理解できるようになるだろう。
・空所補充の１パラグラフサマリーに取り組ませ，そのあと，It says that…の形式の１文要約とコメントを話させる。

○ 教科書の英文読解の際に，意見や感想を促す発問を与えれば，より主体的に内容をとらえることができるだろう。
・理由や背景をたずねる推論発問を通して，生徒に教科書の内容についてより深く考えさせる。

生徒の変化（途中経過，事後の検証結果など）

・第２回スピーキングにかかわるアンケート結果（１２月実施：回答者数 23）＊人数(割合)

	1. ｷｰﾜｰﾄﾞ	2. 自分のことば	3. ｱｲｺﾝﾀｸﾄ	4. ｼﾞｪｽﾁｬｰ	5. 挨拶と確認	6. 相手と協力
つねにできている	10 (43.5%)	9 (39.1%)	8 (34.8%)	10 (43.5%)	15 (65.2%)	13 (56.5%)
ときどきできている	9 (39.1%)	9 (39.1%)	10 (43.5%)	4 (17.4%)	2 (8.7%)	5 (21.7%)
あまりできていない	3 (13.0%)	3 (13.0%)	2 (8.7%)	5 (21.7%)	5 (21.7%)	4 (17.4%)
できていない	1 (4.3%)	2 (8.7%)	3 (13.0%)	4 (17.4%)	1 (4.3%)	1 (4.3%)

（質問項目）１．キーワードを強調して話している。
２．暗記した表現の棒読みではなく，自分のことばとして気持ちを込めて話している。
３．発表で話すときにアイコンタクトができている。
４．ジェスチャーをつけて話している。
５．挨拶・やるべきことの確認をしてから活動をしている。
６．相手と協力し合おうと努力している。

＜分析と考察＞

第１回アンケート結果と比較して，１～３については，「つねに／ときどきできている」と答えた生徒の割合は 30%程度増加し改善の目安を超えた。一方で，４については 60.9%で改善の目安を下回った。理由としては，アイコンタクトを重視して指導し，ジェスチャーについてはあまり指導しなかったためであると推測される。また，５と６については，改善の目安に到達しているが，５は 12.5%減少，６については 12.7%減少した。アンケートでペア活動が嫌いな理由として，相手が積極的に参加しようとしないことを挙げた生徒もいた。年間を通してペア活動に取り組もうとしない生徒が３名おり，前期から後期にかけてその生徒の状況は改善されず，そういった状況に真面目な生徒が嫌になったと推測される。ペア活動が「嫌い」と回答した生徒は第１回アンケート結果と比べて２倍の８名に上った。

・第２回スピーキングテスト（１２月実施：評価対象 22）

結　　果：人数（割合）

評価	読んだ内容の説明	意見や感想	デリバリー
A	19 (86.4%)	22 (100%)	22 (100%)
B	3 (13.6%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
C	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)

＜分析と考察＞

各項目で改善の目安とした A 評価だった生徒の割合は「読んだ内容の説明」については 29.9%増加した。B 評価だった生徒は動詞の活用に誤りがあった。「意見や感想」と「デリバリー」については全生徒が A 評価で改善の目安を超えた。事前，事後のデータがそろっている 21 名についてルーブリックの 3 項目の事前・事後の評価データを検定（Wilcoxon の符号付き順位検定）にかけたところ，デリバリーについて統計学的に有意な向上が認められた（$p = 0.01 < 0.05$）。

教師の変化

導入でどんな質問を投げかけようかよく考えるようになった。考えて投げかけた質問と生徒からの応答からうまく教科書の内容に入っていけたとき，いかに発問や導入が大事かということを実感した。また，教師の話を聞く生徒数も増えたように感じるため，今後も発問と導入に力を入れて授業したい。

今後の課題（次の改善点など）

約 3 割の生徒の進路希望が高卒就職であるなかで，「人見知りだから」「人と話すのが苦手だから」ペア活動が嫌いであると答える生徒の割合を減らすことが今後の課題である。挨拶や，生徒が楽しいと感じるようなトピックの会話練習で，気持ちやことばの交換を通して，相手を理解したり，配慮したりする意識を育てたい。

まとめ・感想

原点回帰，これが 1 年間のアドヴァンスト研修を通して得たものである。これまでも，生徒に不足していると思われる知識・技能を重点的に指導し伸ばしているつもりだった。しかし，この研修を通して最も大切なのは生徒理解であり，４月の授業初日から，生徒をよく見て，生徒の声に耳を傾け，教室の雰囲気の変化により敏感になり，安心してお互いにやり取りできる教室文化を醸成することから始めるべきだと気づいた。「授業づくりの原点は生徒を知ることから」という意識で来年度も継続的にデータを取り，自分の授業を振り返りたい。そして，気持ちやことばを交わす授業を通して他者理解への意識・態度を育成し，人や社会とかかわっていくことができる生徒を育てていけるよう努力していきたい。

授業改善にあたって参考にした資料等

佐野正之(編著). (2005).『はじめてのアクション・リサーチ』大修館書店

会話を継続させるスピーキング指導

科目名	総合英語	学 年	1	形 態	ＨＲ ・ 習熟度 ・ 小集団

クラスの特徴（男女比，雰囲気，進路など）

対象は１年生１クラス，26 名（女子 26 名）の生徒である。英語をはじめ，勉強が苦手な生徒が多いが英語を上達させたいという気持ちを持っている生徒が多い。活発な生徒が多く，明るい雰囲気である。

解決すべき課題

生徒たちには話したいという気持ちはあるが，何を言われているか理解できないことが多くある。また，内容を理解していても，何を話せばよいかわからなかったり，必要な表現や語彙が不足していたりと，答えるまでに時間がかかり会話の継続が難しいのが現状である。

事前の現状把握（アンケート，テストの結果など）

・英語学習に関するアンケート（４月実施：回答者数 26）

１．あなたは英語の学習が好きですか，嫌いですか。

好き	どちらかといえば好き	どちらかといえば嫌い	嫌い
2 人（7.6%）	10 人（38.4%）	9 人（34.6%）	5 人（19.2%）

２．この授業でどのような知識や力を伸ばしたいと思いますか（3 つ選択）。

聞く力	話す力	読む力	書く力	単語・熟語	文法
9 人（34.6%）	25 人（96.1%）	7 人（26.9%）	11 人（42.3%）	9 人（34.6%）	8 人（30.7%）

３．英語を話す力はこれからの生活のなかで必要だと思いますか。

そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらかといえば そう思わない	そう思わない
15 人（57.6%）	10 人（38.4%）	1 人（ 3.8%）	0 人（ 0.0%）

＜分析と考察＞

約半数の生徒は英語が嫌いだという一方で，96%の生徒が英語を話す力はこれからの生活のなかで必要だと考え，同じく約 96%の生徒が伸ばしたい力としてスピーキングを選んでいる。

・第１回スピーキングテスト（８月実施：受験者数 26）

テスト内容：２年次の台湾研修旅行での Brother & Sister Program（現地大学生と英語を使い，交流するプログラム）を想定し，自分の名前や好きなもの，興味のあることなどを話す。

＊評価方法

	タスク達成度	質問	リアクション	話の継続（流暢さ）
A	打ち解けた雰囲気でやり取りできている。	概ね適切な文法で質問している。	自然なリアクションができている。	ほとんど沈黙なく，話を続けている。
B	なんとかお互いに理解し合えている。	誤りはあるが相手にわかるように質問している。	ぎこちなさは残るがリアクションができている	多少の沈黙はあるが話を続けている。
C	理解し合うことに大きな支障がある。	文になっておらず，質問が理解しにくい。	リアクションができていない。	長い沈黙が多い。

＊結果

	タスク達成度	質問	リアクション	話の継続（流暢さ）
A	6 人（23.0%）	7 人（26.9%）	0 人（ 0.0%）	5 人（19.2%）
B	16 人（61.5%）	18 人（69.2%）	18 人（69.2%）	13 人（50.0%）
C	4 人（15.3%）	1 人（ 3.8%）	8 人（30.7%）	8 人（30.7%）

・生徒の自己評価（８月実施：回答者数 26）

	英語で会話することに自信がある	うまくやり取りができた	正しい形の英語でやり取りができた	打ち解けた雰囲気で会話できた
そう思う	4 人（15.3%）	2 人（ 7.7%）	0 人（ 0.0%）	6 人（23.1%）
どちらかといえばそう思う	5 人（19.2%）	10 人（38.4%）	13 人（50.0%）	12 人（46.1%）
どちらかといえばそう思わない	9 人（34.6%）	10 人（38.4%）	11 人（42.3%）	8 人（30.7%）
そう思わない	8 人（30.7%）	4 人（15.3%）	2 人（ 7.6%）	0 人（ 0.0%）

＜分析と考察＞

生徒の様子をふまえテーマを「自己紹介」に設定したが，自己紹介に関する表現は使用頻度が高く定着しているためかタスクを達成できた生徒が多くいた。しかし，質問が Do you ～? のみになってしまう，*What do you like food? のような誤りが頻繁に見られる，黙ってしまう時間が多く，うまくやり取りができないといった課題があることを再認識した。また，生徒自身の評価からも，感じよくやり取りはできたが，正しい形の英語の使用や流暢なやり取りができたと実感している生徒は多くないことがわかり，結果的に会話に「自信がない」生徒の割合が高くなっている。

リサーチ・クエスチョン

身近な話題について適切な文の形でやり取りできる力を身につけさせるには，どのような指導をすればよいか。

改善の目安：・スピーキングテストのルーブリック評価ですべての項目で，B 以上の生徒がそれぞれ全体の 70%以上になる。

・「英語で会話する力が伸びた」と感じる生徒が全体の 70%以上になる。

改善のための手だて

○ 身近な話題について会話活動を継続すれば，英語を話すことに慣れ，自信が高まるだろう。
・帯活動として英語でのやり取りを毎回行い，間違いを気にせずに，会話を続けたことを中心に評価する。また，生徒の発話の共通の誤り等について一斉にフィードバックを行う。
○ 疑問文の構造について指導し，練習させれば会話を続ける力が身につくだろう。
・日常的なやり取りにおいて，会話を発展させる質問を思いつく練習を継続する。
・S +V の構造と 5W1H の疑問文の作り方を明示的に指導し，チャンクとして定着を促す。
○ 会話を継続させるための方略を指導すれば，沈黙することなく会話を継続させられるだろう。
・会話の流れを止めないためのリアクション表現をいくつか限定して指導する。

生徒の変化（途中経過，事後の検証結果など）

・第２回スピーキングテスト（１２月実施：受験者数 26）
テスト内容：２年次の台湾研修旅行で，大学生の興味があることや台湾について聞き出す。
前回のテストの評価項目では相当数の生徒が B 以上の評価となった。研究としては同じ項目で比較を進めるべきであるが，生徒の成長を考え，後期はより高い目標を生徒と共有するためにルーブリックを修正した。具体的には，「タスク達成度」に「相手のことや相手の持つ文化について質問できる」，「質問」に「疑問詞を使って質問できる」をそれぞれの A と B の評価に加えた。
＊結果

	タスク達成度	質問	リアクション	話の継続（流暢さ）
A	22 人（84.6%）	13 人（50.0%）	14 人（53.8%）	8 人（30.7%）
B	4 人（15.3%）	13 人（50.0%）	12 人（46.1%）	15 人（57.6%）
C	0 人（ 0.0%）	0 人（ 0.0%）	0 人（ 0.0%）	3 人（11.5%）

・生徒の自己評価（１２月実施：回答者数 26）

	英語で会話することに自信がある	うまくやり取りができた	正しい形の英語でやり取りができた	打ち解けた雰囲気で会話できた
そう思う	0 人（ 0.0%）	3 人（11.5%）	2 人（ 7.6%）	11 人（42.3%）
どちらかといえばそう思う	16 人（61.5%）	15 人（57.6%）	16 人（61.5%）	13 人（50.0%）
どちらかといえばそう思わない	6 人（23.1%）	8 人（30.7%）	8 人（30.7%）	2 人（ 7.6%）
そう思わない	4 人（15.3%）	0 人（ 0.0%）	0 人（ 0.0%）	0 人（ 0.0%）

＊この授業を通して，会話をする力が伸びたと思いますか。

そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
10 人（38.4%）	15 人（57.6%）	1 人（ 3.8%）	0 人（ 0.0%）

＜分析と考察＞
テストについては内容や評価方法が異なっており，単純な比較はできないが，すべての項目で B 以上の評価の生徒がそれぞれ 70%を超え，改善の目標に達した。2 回の評価データについて検定（Wilcoxon の符号付き順位検定）を行ったところ，「話の継続（流暢さ）」以外の項目で有意な向上

が認められた（それぞれ $p = 0.00 < 0.05$）。生徒の自己評価も，各項目で「（どちらかといえば）そう思う」という生徒の数が増えている。もう一つの改善目標である「英語で会話する力が伸びた」と感じる生徒の割合については,「（どちらかといえば）そう思う」が 96.0%となり，目標値の「70%以上」を大きく上回った。時間をかけて基礎的な文法や表現を指導し，毎回の授業の会話練習で使用を促した結果, 多くの生徒がフィードバックを生かして取り組み, できることを増やしていったと思われる。明るく，ミスを許容するクラスの雰囲気も，生徒のスピーキング能力向上の一助となったと感じる。

教師の変化

・生徒のニーズが目に見える形になったことで，必要な指導項目や活動が明確になり，授業づくりがスムーズにできるようになった。
・教材や指導法の研究にかける時間や，授業について他の教師と協議する時間が増えた。
・仕事の達成感を感じることができるようになった。

今後の課題（次の改善点など）

・授業改善やゴールの設定のために，４月などの早い段階で一度調査をし，生徒の能力をさらに具体的に把握する必要があった。また，結果が出ず，自信が持てなかった生徒への支援も考えたい。
・発音やアクセント，会話のストラテジーについて，もっと時間を確保し，指導していきたい。
・海外修学旅行など実際の英語使用の場面と授業を結びつけ，生徒の「もっと英語を学びたい」いう気持ちを引き出しながら，それに応えられる，より効果的な指導を工夫していきたい。

まとめ・感想

今年の授業にはドキドキと達成感があった。初めて本格的にアクション・リサーチを行ったが，ある程度成果も上がり，スピーキングの活動やテストに多くの生徒が笑顔で取り組んでいたことに，この上ない喜びを感じた。どのような力を伸ばし，その力がなぜ必要なのかを具体的に示し，共有し，授業を進めることが大切であると感じた。今後も，生徒の力を知り，伸ばすための方策を考え，実行できる授業力・改善力を磨いていかなければならないと思う。今回の研修を通じて，英語教育に関するさまざまな理論や教授法を指導していただき，これらにしっかりと向き合うことで，私は本当の意味で「英語の先生」の世界に立てたと実感した。授業には「楽しさ」が必要であり，entertainment の要素は不可欠であると思うが，できる喜びから来る「楽しさ」こそ，提供していかなければならないものである。この授業改善で，教師の仕事は doctor の仕事に近いと考えるようになった。生徒の英語力を高め，よりよい人生を送るための資質・能力を育てることがわれわれ英語教師の使命であるが，そのためには生徒の課題を発見し，的確な診断に基づいて，適切な解決策を処方することが肝要である。今後も同僚と協働し, 生徒とともに成長し続け, お互いが高め合える関係を構築しながら授業改善に取り組んでいきたい。

授業改善にあたって参考にした資料等

・廣森友人(著). (2006).『外国語学習者の動機づけを高める理論と実践』多賀出版
・岡田圭子・ブレンダ･ハヤシ・嶋林昭治・江原美明. (2015).『基礎から学ぶ英語科教育法』松柏社

「質問力」「応答力」の基礎を固めるスピーキング指導

科目名	コミュニケーション英語Ⅲ	学 年	3	形 態	ＨＲ ・ 習熟度 ・ 小集団

クラスの特徴（男女比，雰囲気，進路など）

対象は３年生１クラス 16 名（男子 12 名，女子４名）の生徒である。進路については生徒の８割が４年制大学を希望しているが，その内訳は推薦入試や AO によるものがほとんどで，一般入試による受験希望者はほぼいない。授業には真面目に取り組み，ペアで行う練習などは活発に行っている。

解決すべき課題

授業への取組はよいが，多くの生徒が英語自体に苦手意識を持っており，基礎的文法の知識も不足しているため，簡単な質問や応答を含め，英語でのやり取りを続けることが困難である。特に自己表現の要素が多い活動になると，やり取りが乏しいものになってしまうことがある。

事前の現状把握（アンケート，テストの結果など）

・生徒の意識アンケート（５月実施：回答者 16 名）

英語自体や英語の授業に対する生徒の意識についてアンケートを実施した。

１．あなたは英語が好きですか。

好き	どちらかといえば好き	どちらかといえば嫌い	嫌い
１人（ 6.3%)	５人（31.3%)	９人（56.3%)	１人（ 6.3%)

２．この授業でどのような知識や力を伸ばしたいと思いますか（複数回答可)。

書く力	話す力	読む力	文法の知識
９人（56.3%)	７人（43.8%)	７人（43.8%)	５人（31.3%)

３．どのようなことを英語で話せるようになりたいですか（複数回答可)。

身近なことがらについての簡単な説明	聞いたり読んだりしたことへの簡単な意見・感想	身近な話題についての意見	自分・家族・学校などの紹介
９人（56.3%)	９人（56.3%)	３人（18.8%)	１人（ 6.3%)

＜分析と考察＞

半数以上の生徒が英語について「(どちらかといえば）嫌い」であることがわかった。しかし，半数以上または半数近くの生徒が発表技能の向上を望んでいた。特に「話すこと」の内容としては，「身近なことがらについての簡単な説明」「聞いたり読んだりしたことへの簡単な意見・感想」への関心が高かった。自由記述で話すことについての課題をたずねたところ，「発音に自信がなくうまく話せない」ということが複数の生徒から挙げられた。これらのことから，まず基礎的な指導や練習で自信を高めながら，徐々に話す内容の充実を図っていくことが必要であると感じた。

・第１回スピーキングテスト（５月実施：受験者 16 名）

「休日の過ごし方や買い物について（日常生活の場面）」というトピックについて，英語で質問する力と，質問に答える力を調べた。質問力については，提示された１文（例：I went to a famous Chinese reataurant yesterday.）について，１分間でできる限りの質問をさせ，その内容・形式を評価した。応答力については，トピックに関する３つの質問に対する応答を評価した。

＊評価ルーブリック

評価	質問力	応答力	態度
A	SV を含んだ文で，文脈に即した質問を４問以上している。	SV を含んだ文で，文脈に即した応答をし，文構造にエラーがほとんどない。	質問や応答だけでなく，相づちを加えてコミュニケーションを継続させている。
B	SV を含んだ文で，ある程度文脈に即した質問を，1～3 問している。	SV を含んだ文で，ある程度文脈に即した応答ができるが，文構造に多くのエラーがある。	質問や応答をすることでコミュニケーションを継続させている。
C	SV を含んだ文でなく，単語のみで質問をしていたり，文脈に反した質問をしたりしている。	SV を含んだ文でなく，単語のみであったり，文脈に反した応答をしたりしている	沈黙を続けるなど，コミュニケーションを継続させようとしていない。

＊結果：

評価	質問力	応答力	態度
A	１人（ 6.3%）	３人（18.8%）	２人（12.5%）
B	８人（50.0%）	８人（50.0%）	14 人（87.5%）
C	７人（43.8%）	５人（31.3%）	０人（ 0.0%）

＜分析と考察＞

質問力では約９割の生徒が B・C 評価であり，質問が続かない，文構造のエラーが多いなどの課題が見られた。応答力でも B・C 評価が８割を超えた。詳しく見ると，B 評価では特に，１文で動詞を複数使う，主語が変わってしまうなどの発話が散見された。C 評価では，答えようとはするものの，表現がわからず名詞を並べただけで，意図が伝わらないケースが見られた。態度に関しては，C 評価になった生徒はいなかったが，相づちによって会話を円滑にしようとする意識までは見られなかった。これらの結果から，まず基礎的な文構造の指導・練習が必要であることを強く感じた。さらに，相手の言うことに相づちなどで反応することで，興味を持って聞いていることを表す ‘good listener’の姿勢，コミュニケーションへの積極的な態度の重要性も指導しなければならないと思った。

リサーチ・クエスチョン

身近な話題について，文の形で即興的にやり取りする力を身につけさせるには，どのような指導をすればよいか。

改善の目安：・ルーブリック評価の「質問力」「応答力」「態度」の各項目で，B 評価以上となる生徒がそれぞれ全体の７割以上になる。

・「会話力が伸びた」と感じる生徒が全体の７割以上になる。

改善のための手だて

○ 基本的な文構造を指導し練習させれば，文の形でのやり取りができるようになるだろう。
・帯活動として，平易な定型文をグループで練習する。
・主語と動詞を含んだ英問英答の問題演習をくり返す。

○ 身近な話題に関する会話練習を継続すれば，英語でのやり取りに慣れ，即興的に質問や応答ができるようになるだろう。
・帯活動として，1つのキーワードに対して，質問と応答のやり取りを時間内にできる限り続ける練習を行う。

○ 明示的な音声指導を行い練習させれば，正しい発音やイントネーションで，相手に伝わる質問と応答をすることに役立つだろう。
・教科書の内容に関する英文の質問文を作らせて，全体の前で読み上げさせ，音声的な指導を行う。

生徒の変化（途中経過，事後の検証結果など）

・即興的なやり取りをする能力の向上

今回手だてとした会話練習を始めた時点では，WH-疑問文と Yes/No 疑問文の違いを十分に理解しておらず，質問自体だけでなく，応答に関しても適切な発話ができていなかった。しかし，質問をするポイントやその形式を学び，帯活動として練習を重ねることで，質問の型がある程度身について，トピックが変わっても，質問や応答ができるようになった。そのことにより沈黙もなくなり，一定時間のなかでの質問数が飛躍的に伸びた。

・第２回スピーキングテスト（１２月実施：受験者 16 名）

第１回と同様のトピック，同様の形式でスピーキングテストを行い，生徒の力の伸びを調べた。

＊結果

評価	質問力	応答力	態度
A	9 人（56.3%）	4 人（25.0%）	7 人（43.8%）
B	4 人（25.0%）	12 人（75.0%）	9 人（56.3%）
C	3 人（18.8%）	0 人（ 0.0%）	0 人（ 0.0%）

＜分析と考察＞

質問力について，特に A 評価の人数が，1 人(6.3%)から 9 人(56.3%)へ飛躍的に伸びた。このことから，質問力とともに，やり取りに対する積極性の向上もうかがえる。応答力では，C 評価の生徒は 0 人で，質問に答えることに関しては，全員が SV を含む文で発話できるようになった。態度については，特に A 評価が 2 人(12.5%)から 7 人(43.8%)に上昇し，相づちを入れながらやり取りができる生徒が増えた。どの項目においても B 評価以上の生徒が 7 割を超え，改善の目標に達した。

・生徒の意識アンケート：会話力の向上について（１２月実施：回答者 16 名）

＊あなたは自分の英語での会話力が伸びたと思いますか。

そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらかといえば そう思わない	そう思わない
4 人（25.0%）	7 人（43.8%）	5 人（31.3%）	0 人（ 0.0%）

＜分析と考察＞

会話力が（どちらかといえば）伸びたと感じている生徒は，わずかに７割に届かず，目標値には届かなかった。伸び悩んだ原因は，英語を話すことに慣れていくにつれて，表現したい内容に対して，必要な語彙・文法の知識が追いつかなくなってしまったためかもしれない。今後は，「言いたかったが言えなかったこと」を学習の好機として，活動の後に語彙・文法についてふり返り，会話に使える表現のレパートリーを自律的に増やしていけるような指導の工夫が必要だと思った。

教師の変化

・質問力，応答力，コミュニケーションを円滑にするための相づちなど，生徒に必要な「話す力」のサブスキル（下位技能）を考え,それぞれの課題を検討できるようになったことで，より効果的な指導やフィードバックを与えることができるようになった。
・パフォーマンステストの評価と指導のつながりについて，これまであまり深く考えてこなかったが，今回のアクション・リサーチを通して，目標設定や評価の観点となる下位技能，授業での指導とのつながりを意識して行うようになった。このことより，今後のパフォーマンステストにおいて，各技能のどのようなサブスキルに焦点を当てるのか，それに基づいてどのようなことを共通で指導しなければならないかが明確になり，パフォーマンステストを組織的に行うことに自信を持つことができた。

今後の課題（次の改善点など）

・会話練習時に，発話のエラーに対する適切なフィードバックをタイミングよく与えるようにしたい。
・全体としてまだ発話のための表現が不足しているので，汎用性の高い表現を適宜提示し続けることが必要である。
・生徒が自身の発話の課題に気づく機会を増やすために，音声指導をより充実させ，会話練習や音読練習などで，生徒同士が学習したことに基づいて相互にフィードバックが行えるようにしたい。

まとめ・感想

今回のアクション・リサーチを通して，生徒たちが英語でのやり取りを積極的に行えるようになったことが一番の成果であったと考える。活動中も，英語での質問に対する発言が積極的になったり，ペアが困っているときの声掛けが英語になったりと，英語でのやり取りが格段に多くなった。また，教師にとっても，生徒の成長を目で見える形にできるアクション・リサーチを実践することで，生徒の英語能力だけでなく，情意面の変容をより細かく把握することができるようになった。ただ教科書に沿って授業を行うのではなく,今回の経験を活かし,まず生徒のニーズを把握して,それに基づく目標を設定し,目標達成のための的確なアプローチを考えて実行し，生徒の英語力・意識の向上の検証から，さらなる方策を講じるという，体系的な授業づくり・授業改善を続けていきたいと思う。

即興的に英語でやり取りする力を高める指導

科目名	コミュニケーション英語Ⅰ	学 年	1	形 態	ＨＲ ・ 習熟度 ・ 小集団

クラスの特徴（男女比，雰囲気，進路など）

対象は１年生１クラス 40 名（男子 18 名，女子 22 名）の生徒である。元気な生徒が多く，ペアワークなどの活動には積極的である。ほぼすべての生徒が大学進学を希望している。

解決すべき課題

英語を話すことに対して積極的な生徒と消極的な生徒が混在している。消極的な生徒は抵抗感や恥ずかしさを感じているため，英語を話すことに慣れさせていく必要がある。また，教科書で扱われるレベルの英語であれば概ね理解できているが，スピーキングについては中学レベルの英語であっても適切に運用できていない場面が見受けられる。基礎的な指導からはじめ，知識として理解している言語材料を表現できるよう指導していきたい。

事前の現状把握（アンケート，テストの結果など）

・事前アンケート（５月下旬実施：回答者数 39）

Q1 授業で伸ばしたい力は何ですか。	回答数	比率
英語を聞く力	18	46.2%
英語を話す力	28	71.8%
英語を読む力	14	35.9%
英語を書く力	16	41.0%

Q2 英語を話す力は今後の生活のなかで必要だと思いますか。	回答数	比率
そう思う	24	61.5%
どちらかといえばそう思う	14	35.9%
どちらかといえばそう思わない	1	2.6%
そう思わない	0	0.0%

＜分析と考察＞

授業で伸ばしたい力については７割の生徒が「英語を話す力」と回答している。また，ほとんどの生徒が「英語を話す力は今後の生活のなかで（どちらかといえば）必要」だと感じているため，授業でも扱っていく必要がある。

・第１回スピーキングテスト（６月中旬実施：受験者数 39）

テスト内容：ペアごとに 2 つの身近なことがらについてのトピックをランダムに与え，2 分間即興で会話を続ける力を測る。

トピック例：“My favorite Subject”, “My favorite Athlete or Musician”,
“My Plans for the Weekend”, “My Dream for the Future”,
“A Book or a Magazine I Like”, “My Favorite Meal”など

評価方法　：自作のルーブリックによる分析的評価

	質問力	応答力	伝え方
A	適切な文の形で質問している。	相手の質問や答えに適切な文の形で応答している。	強調やくり返しなど理解を促す工夫をしながら，相手が理解できる話し方で伝えている。
B	一部適切な文の形ではないが，単語を並べて質問している。	一部適切な文の形ではないが，単語を並べて応答している。	相手が理解できる話し方で伝えている。
C	適切な文の形で質問していない。	適切な文の形で応答していない。	相手が理解できる話し方で伝えていない。

（備考）「適切な文の形」とは S＋V 構造が確立し，動詞の形が適切かつトピックに沿う質問や応答であることとする。

（ルーブリック評価の結果）

	質問力	応答力	伝え方
A	4（10.2%）	6（15.3%）	0（ 0.0%）
B	12（30.7%）	16（41.0%）	32（82.0%）
C	23（58.9%）	17（43.5%）	7（17.9%）

＜分析と考察＞

質問力： How about you? や Yes / No questions (closed questions) などの形ついては定着しているが，Wh-questions (open questions) については，多くの生徒に課題が見られた。

応答力：単文（S＋V が１つだけで成り立つ文）またはフレーズのみでの応答が多く，追加の情報等が少なく，会話が広がりにくかった。

伝え方：基本的には相手が理解できる話し方であったが，ルーブリック評価で A に該当するような工夫は見られなかった。

<u>リサーチ・クエスチョン</u>

身近なことがらについて，即興で会話を続ける力を身につけさせるにはどのような指導をすればよいか。

改善の目安：スピーキングテストの評価ルーブリックの各項目で B 評価以上の生徒がそれぞれ全体の 7 割以上になる。

アンケート調査で「英語を話すことに以前よりも抵抗感や恥ずかしさが減った」，「英語を話す力は以前よりも身についた」と肯定的に回答する生徒が全体の 7 割以上になる。

改善のための手だて

○ 帯活動として会話練習を継続すれば，適切な文の形で質問・応答することに慣れ，会話を続けることができるようになるだろう。
・授業のはじめに，モデルを示しながら，身近なことがらに関する会話活動を継続的に行う。
・生徒の発話を聞いて，活動後に，疑問文やその答え方について明示的なフィードバックを行う。

○ 会話を円滑に進めるための表現を指導し，練習させれば，会話を継続させることに役立てることができるだろう。
・聞き返す，強調する，くり返す，言い換えるなどの会話ストラテジーを指導する。
・相手の発話に反応するための表現（That's interesting, I got it, Awesome など）を指導する。

○ 明示的な音声指導と練習を行えば，より英語らしく，場にふさわしい話し方ができるようになるだろう。
・必要に応じて教科書の英文から取り出した文について，強弱，音変化，イントネーションなどの音声指導を行い，それらを意識しながら英文のメッセージを適切に伝えるような気持ちを込めた音読練習をさせる。

生徒の変化（途中経過，事後の検証結果など）

・事後アンケート（１２月上旬実施：回答者数 39）

Q1 英語を話すことの抵抗感や恥ずかしさは減りましたか。	回答数	比率
そう思う	24	61.5%
どちらかといえばそう思う	14	35.9%
どちらかといえばそう思わない	1	2.6%
そう思わない	0	0.0%

Q2 英語を話す力は以前よりも身についたと思いますか。	回答数	比率
そう思う	4	10.2%
どちらかといえばそう思う	29	74.4%
どちらかといえばそう思わない	6	15.4%
そう思わない	0	0.0%

＜分析と考察＞

改善の目安に設定した 2 項目（「英語を話すことの抵抗感や恥ずかしさは減りましたか」，「英語を話す力は以前よりも身についたと思いますか」）について，肯定的に回答する生徒が 7 割以上になるという目標を達成できた。

・第２回スピーキングテスト（１２月中旬実施：対象者数 40）

（ルーブリック評価の結果比較）

	質問力		応答力		伝え方	
	６月	１２月	６月	１２月	６月	１２月
A	4（10.2%）	5（12.8%）	6（15.3%）	6（15.4%）	0（ 0.0%）	6（15.4%）
B	12（30.7%）	22（56.4%）	16（41.0%）	26（66.7%）	32（82.0%）	32（82.1%）
C	23（58.9%）	13（33.3%）	17（43.5%）	8（20.5%）	7（17.9%）	2（ 5.1%）

＜分析と考察＞

ルーブリック評価の各項目で，B 評価以上の生徒が全体の 7 割以上になるという改善の目安は「応答力」と「伝え方」については目標を達成できた。「質問力」については 69.2%でわずかに 7 割には届かなかったが，第 1 回の 40.9%からは進歩が見られた。事前，事後のデータがそろっている 39 名分について検定（wilcoxon の符号付き順位検定）にかけたところ，統計学的に有意な向上が認められた（「質問力」$p=0.00<0.05$，「応答力」$p=0.02<0.05$，「伝え方」$p=0.00<0.05$）。

教師の変化

授業改善のために英語運用能力や指導技術の向上に努めてきたが，目の前にいる生徒が抱えている課題やニーズに対して，具体的にどのような指導の工夫をすべきなのかをより深く考えるようになった。また，目標を明確化し，生徒と共有したことで，これまで以上に授業が活気づくとともに，生徒の理解や定着を確認しながら，臨機応変に授業をするようになった。

今後の課題（次の改善点など）

スピーキングテストの結果から，何とか意思疎通はできていたものの「適切な文の形で」という面ではまだ課題がある。「適切な文の形」での質問力や応答力の向上に努めながらも，今後はより高度なトピックに関するスピーキング活動が必要である。「身近なことがら」だけでなく，今後は新学習指導要領で示されているとおり，「日常的な話題」のみならず「社会的な話題」も取り扱っていく。

まとめ・感想

事後のアンケートの「スピーキング活動について，これからもやりたいと思いますか」という問いに対して，9 割弱の生徒が肯定的に回答しているため，今後もスピーキングの活動をより効果的に組み入れていきたい。

このたびの研修では，アクション・リサーチのほんの一部分について学んだだけだが，体感したことで異なる視点からの授業改善について考えるきっかけになった。今後も継続的にアクション・リサーチに取り組むとともに，周囲を積極的に巻き込みながら，組織的指導力向上に貢献していきたい。

授業改善にあたって参考にした資料等

本多敏幸(編者).(2016).『即興スピーキング！』アルク

基礎的な英語でやり取りする力を伸ばす指導

科目名	コミュニケーション英語Ⅲ	学 年	3	形 態	ＨＲ ・ 習熟度 ・ 小集団

クラスの特徴（男女比，雰囲気，進路など）

対象生徒は３学年３クラス 103 名（男子 56 名，女子 47 名）である。英語学習については中学校レベルの既習事項の理解が不十分なために苦手意識や抵抗感を持つ生徒が多いが，ペアワークやグループワークに関しては活発に参加する。進学のために一般入試を受ける生徒はほとんどおらず，大学や短大，専門学校に推薦で入学する生徒が多い。また，卒業後と同時に就職する生徒が半数である。

解決すべき課題

英語に対する苦手意識があり，積極的に学習に取り組むことができない。「英語を話せるようになりたい」という意欲はあるようだが，文法や語彙が不十分なため英語での会話練習では，会話が発展せず，すぐに終わってしまう。将来の彼らが自信を持って英語で発言ができるように，授業内で基本的な知識を身につけながら自分の考えを英語で話す力を育てたい。

事前の現状把握（アンケート，テストの結果など）

・第１回英語学習に関するアンケート（６月：回答者数 103）

１．あなたは英語の学習が好きですか，嫌いですか。

好き	どちらかといえば好き	どちらかといえば嫌い	嫌い
19 人(18.4%)	42 人(40.7%)	17 人(16.5%)	25 人(24.3%)

２．あなたは英語を話すことが得意だと思いますか，苦手だと思いますか。

得意	どちらかといえば得意	どちらかといえば苦手	苦手
6 人(5.8%)	25 人(24.3%)	45 人(43.7%)	27 人(26.2%)

３．授業でどのような力を伸ばしたいと思いますか。(3 つまで回答可)

英語を話す力	英語を聞く力	英語を読む力	英語を書く力
72 人(69.9%)	52 人(50.4%)	36 人(34.9%)	26 人(25.2%)

４．英語を話す力はこれからの生活のなかで必要だと思いますか。

そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
43 人(41.7%)	46 人(44.7%)	9 人(8.7%)	5 人(4.9%)

＜分析と考察＞

「英語の学習が（どちらかといえば）好き」と答えた生徒が約 6 割いることにまず驚いた。英語を話すことについては，約 7 割の生徒が力の向上を望んでいるものの，苦手であると回答した。8 割以上の生徒が，将来の必要性を感じているなかで，楽しく学習しながら，話す力を伸ばす工夫が必要であるとあらためて感じた。

・第 1 回　スピーキングテスト（7 月実施：受験者数 101）

テスト内容：身近な話題に関する教師と生徒との 1 対 1 の会話

評価方法　：自作ルーブリックによる評価

会話活動のルーブリック評価

	質問力	応答力	話し方
A	正確な文の形で質問している。	正確な文の形で応答している。	声の大きさ，アクセント，イントネーション，区切りが適切であり，相手にわかりやすく工夫して話している。
B	正確な文の形にはなっていないが，単語を並べて質問している。	正確な文の形にはなっていないが，単語を並べて応答している。	声の大きさ，アクセント，イントネーション，区切りが適切である。
C	ほとんど何も質問することができない。	ほとんど何も応答することができない。	話し方が棒読みになっている。

	質問力	応答力	話し方
A	9 人(8.9%)	11 人(10.9%)	8 人(7.9%)
B	21 人(20.7%)	78 人(77.2%)	7 人(6.9%)
C	71 人(70.3%)	12 人(11.9%)	86 人(85.1%)

＜分析と考察＞

応答力では 8 割以上の生徒になんとか単語を並べて答えようとする姿勢が見られ，話すことに抵抗感はあまりないように感じた。しかし，単語 1, 2 語のみでの回答も目立ち，正確な文の形での応答は少なかった。質問力では 7 割の生徒が黙ってしまうか，単語を並べるだけに終わってしまった。また，8 割以上の生徒の話し方が棒読みのようであり，音声指導の必要性を再認識した。

<u>リサーチ・クエスチョン</u>

英語を話すことに抵抗感を持たずに，概ね正しい文の形で，やり取りできる力を身につけさせるにはどのような指導をすればよいか。

改善の目安：・インタビューテストの評価ルーブリックで各項目 B 評価以上の生徒がそれぞれ全体の 7 割以上になる。

・事後のアンケートで「話す力が前より身についた」と回答する生徒が全体の 7 割以上になる。

改善のための手だて

○ 身近な話題に関する会話活動をくり返せば，英語を話すことに慣れ，自信が高まるだろう。
・週に２回以上，自分の考えを述べるペアワーク，グループワークを実施する。
・会話の枠組みを与え，答えを考えさせる。
・一人ひとりに前向きなフィードバックを行う。
・ペア同士，グループ内で相互評価，自己評価を行う。

○ 疑問文とその答え方について指導し練習させれば，概ね正しい文の形で会話をすることができるようになるだろう。
・Yes-No 疑問文，WH 疑問文を正しく活用できるように確認しながら練習させる。
・S+V の形での発話をするために，英語と日本語の語順の違いを確認しながら練習させる。

○ 基礎的な音声指導を行い練習させれば，よりわかりやすい英語でやり取りできるようになるだろう。
・棒読みではなく，声の大きさ，アクセント，イントネーション，区切りなどを意識して，相手にわかりやすく伝える練習をさせる。

生徒の変化（途中経過，事後の検証結果など）

・第２回英語学習に関するアンケート（１２月：回答者数 103）

１．あなたは英語の学習が好きですか，嫌いですか。

好き	どちらかといえば好き	どちらかといえば嫌い	嫌い
24 人(23.3%)	33 人(32.0%)	35 人(34.0%)	11 人(10.7%)

２．あなたは英語を話すことが得意だと思いますか，苦手だと思いますか。

得意	どちらかといえば得意	どちらかといえば苦手	苦手
5 人(4.9%)	25 人(24.3%)	45 人(43.7%)	28 人(27.2%)

３．授業でどのような力が伸びたと思いますか。(3 つまで回答可)

英語を話す力	英語を聞く力	英語を読む力	英語を書く力
64 人(62.1%)	79 人(76.7%)	29 人(28.2%)	17 人(16.5%)

４．これまでの英語の授業で，話す力は前より身についたと思いますか。

そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
15 人(14.6%)	66 人(64.1%)	20 人(19.4%)	2 人(1.9%)

５．英語を話す力はこれからの生活のなかで必要だと思いますか。

そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
33 人(32.0%)	59 人(57.3%)	10 人(9.7%)	1 人(1.0%)

・第２回　スピーキングテスト（１２月実施：受験者数 101）
テスト内容：身近な話題に関する教師と生徒との１対１の会話
評価方法　：自作ルーブリックによる評価

	質問力	応答力	話し方
A	19 人(18.8%)	27 人(26.7%)	13 人(12.9%)
B	60 人(59.4%)	65 人(64.4%)	82 人(81.2%)
C	22 人(21.8%)	9 人(8.9%)	6 人(5.9%)

＜分析と考察＞

インタビューテストの全評価項目で，B 評価以上の生徒が約 8 割～9 割超になり，改善の目標を超えた。A 評価の生徒もすべての項目で増加した。また，特に「質問力」「話し方」で C 評価の生徒が大幅に減少していることから，疑問文や発音・イントネーションの指導に効果があったと考えられる。また，アンケートでも，苦手意識は残るものの，「前より話す力が（どちらかといえば）身についた」と答えた生徒が 8 割近くになり改善の目標に達した。伸びた技能として「聞く力」を挙げた生徒が最も多く，ペアワークの会話練習などにより，粘り強く英語のやり取りを続けた成果を感じた。

教師の変化

生徒が楽しく英語の授業を受けるだけでなく，「英語を話せるようになる」という目標を達成できる授業の進め方をじっくりと考えるようになった。今までは時間に追われてできなかった ICT の活用にも挑戦し，ペアワーク，グループワークを中心に授業を進め，メリハリのある時間配分に気をつけた。また，この研修で学んだ教授法や活動を授業に取り入れ，生徒の反応がよかったものは何度も行った。その結果，生徒が英語を楽しそうに話す姿を見ることができて，授業改善への意欲が高まった。

今後の課題（次の改善点など）

英語を話す機会を増やし，慣れることから始めたため，リサーチ・クエスチョンにある「概ね正しい文の形で質問し，応答する」という目標は達成できなかった。疑問文の作り方の指導を徹底し，復習する時間を確保するべきであった。フレームを活用し，生徒同士で会話し合うことのみで終わってしまったため，次年度はフレームのなかで使われている文法事項，語彙・表現の応用練習を取り入れたい。併せて，より充実した音声練習も必要である。また，英語科全体の意識・指導力向上のために，授業改善について意見交換したり，研究時間を確保したりすることにも今後取り組んでいきたい。

まとめ・感想

これまで自分が，生徒が楽しいと思えるような授業をすることだけを優先してきたということを実感した 1 年だった。「英語を話せるようになりたい」という生徒の思いを知り，実際に会話活動をすると生き生きと活動している姿を見ることができた。リサーチに追われるときもあったが，単元ごとにどのような活動をしようか考える時間が，私にとって本当に楽しい時間だったと今は思う。このような研修の機会を頂けたことに心から感謝するとともに，アドヴァンスト研修でご指導頂いた先生方，一緒に研修に参加した他校の先生方，そしてさまざまなことに一緒に挑戦してくれた生徒たちにお礼を伝えたい。

より速く的確な英文読解力を育てる指導

科目名	コミュニケーション英語□	学 年	1	形 態	HR ・ 習熟度 ・ 小集団

クラスの特徴（男女比，雰囲気，進路など）

対象は 2 クラス 80 名（男子 45 名，女子 35 名）の生徒である。授業においては，3 分の 2 程度の生徒が投げかけた質問に対して理解し，答えることができる。比較的ペアワーク，グループワークを好む生徒が多い。

解決すべき課題

9 割程度の生徒が大学進学を希望しているものの，教科書以外の初見の英文を読んで理解する活動に自信を持って取り組んでいる生徒は少数であると思われる。希望する進路を実現するために，ある程度のレベルの初見の長文問題に，自力で取り組むための力が必要である。

事前の現状把握（アンケート，テストの結果など）

・英語に関するアンケート（6 月実施：回答者数 78）

1．あなたは英語の学習が好きですか？

そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらかといえば そう思わない	そう思わない
23 人（29.5%）	37 人（47.4%）	14 人（17.9%）	4 人（ 5.1%）

2．あなたは英語が得意だと思いますか？

得意	どちらかといえば 得意	どちらかといえば 苦手	苦手
6 人（ 7.7%）	32 人（41.0%）	23 人（29.5%）	17 人（21.8%）

＜分析と考察＞

英語の学習が好きな生徒が多く(76.9%)，読むことに対する自信も予想以上に多くの生徒が持っていた(48.7%)。これは，生徒の多くが中学校時代，英語の学習に苦労しておらず，テキストの英文自体も比較的単純で，音読の練習をすれば内容を理解できる程度であったためと推察できる。

・第 1 回　読解力テスト（6 月実施：受験者数 62）＊分析対象は第 1 回，2 回の両方を受験した生徒

過去の英語検定 2 級の長文読解問題（2B, 3B, 3C）を使って生徒の読解力を調べた。(12 点満点)

問題番号	2B				3B				3C			
	24	25	26	30	31	32	33	34	35	36	37	38
解答率	100%	98.4%	95.2%	93.7%	92.1%	85.7%	82.5%	73.0%	68.3%	68.3%	60.3%	61.9%
正答率	68.3%	39.7%	54.0%	46.0%	44.4%	33.3%	28.6%	41.3%	25.4%	33.3%	20.6%	15.9%

平均値(正答率)：4.5 (37.6%)　6 割以上(7 問以上)正答：8 人（12.9%)

＜分析と考察＞

3C の問題の解答率，正答率ともに低くなっていることから，クラス内でも，読む速度に大きな差があることが推察される。解答中，3C の問題にまったく手がつかない，または途中であきらめてしまう生徒が目立った。生徒たちにリーディングストラテジーの知識がなく，わからない単語に出会った際，その単語の意味を推測することもできていないと思われる。

リサーチ・クエスチョン

英検２級レベルの初見の長文を自分の力で読み，素早く概要や要点，論理展開を理解できる力を身につけさせるには，どのような指導をすればよいか。

改善の目安：・英検２級レベルの長文問題で 6 割以上得点できる生徒が全体の 7 割以上になる。

・授業で扱ったリーディングストラテジーを，「使えるようになった」と実感する生徒が全体の 7 割以上になる。

・「英文を読む力が伸びた」と感じる生徒が全体の 7 割以上になる。

改善のための手だて

○ リーディングストラテジーを指導し，練習させれば，より効率的で正確な読解ができるようになるだろう。

・未知語の推測をさせるために，読解前に確認する語彙を限定する。

・リーディングタスクとしてトピックセンテンスの把握をさせる。

・ディスコースマーカーの指導をし，段落内，段落間のつながりを掴む読解活動を与える。

○ 教科書英文に関する読解タスクを工夫すれば，より的確に概要や要点を把握することができるようになるだろう。

・ワークシートの設問の答えが，その段落の概要や要点になるように工夫をする。その際，必ず本文を読む前に設問を生徒に提示し，何を知るためにこれから本文を読むのか，目的意識を持って読むことを促す。

・内容理解のために作ったスライドを生徒分印刷し，できるだけ自分のことばで内容を英語で説明（リテリング）できるようにする。

・授業の終わりに，その日の授業で行った題材の内容を一言で言い表す練習をする。

○ 定期的に初見の英文読解に取り組ませれば，自分のリーディングスキルの向上が確認でき，自信につながるだろう。

・教科書英文読解後に，学習した内容や語彙等がスキーマとなって読めるような，類似したトピックの英文を読ませる。

・総合的な読解力を確認するために，民間の英語試験や大学入試の長文問題に取り組ませる。

生徒の変化（途中経過，事後の検証結果など）

・リーディングストラテジーの導入に対する反応

読解前に確認する語彙を制限することで，ディスコースマーカーなどを参考に英文の流れを理解し，未知語を推測しながら概要や要点をとらえる習慣がついてきた。新出単語の導入時に，ビジュアル教材を利用することにより，逐語訳にとらわれず，文章の概要や要点を読み取る活動に取り組めていた。

・教科書の読解タスクの工夫に対する反応

概要や要点の的確な読解ができるようになったことで，キーワードとなる単語を使い，自分のことばで英文の内容を英語で説明することができるようになった。未知語に出会った際も，文章の概要や要点をとらえることができているので，支障なく本文を読み進めることができるようになった。

・第２回　読解力テスト（１２月実施：受験者数 62）＊分析対象は第１回，２回の両方を受験した生徒

英語検定２級の長文読解問題（2B, 3B, 3C）を使って，再度生徒の読解力を調べた。(12 点満点)

問題番号	2B				3B				3C			
	24	25	26	30	31	32	33	34	35	36	37	38
解答率	100%	100%	100%	98.4%	98.4%	98.4%	96.8%	98.4%	98.4%	96.8%	95.2%	95.2%
正答率	59.7%	50.0%	50.0%	72.6%	50.0%	54.8%	64.5%	58.1%	61.3%	51.6%	72.6%	66.1%

平均値(正答率)：7.1 (59.3%)　6 割以上(7 問以上)正答：42 人 (67.7%)

＜分析と考察＞

6 割（7 問）以上正答した生徒は 67.7%になり，第１回の 12.9%から大幅に増えているが，改善の目安にはわずかに届かなかった。全体の正答率は 59.3%で，まだ満足できる結果とはいえないが，2 回分がそろっている 62 人のデータについては統計的に有意な向上が見られ（t 検定: $p = 0.00 < 0.05$），今回の取組に一定の成果があったのではないかと考えられる。特に 3C の解答率が前回に比べ大幅に上がったことから，読む速度に大きな向上が見られたと判断できる。

教師の変化

・英文の概要や要点の読み取りなど，適切な読解タスクを与えられるようになった。
・以前は，語彙や文構造などの詳しい解説にかなりの時間を割いてきたが，生徒の気づきや自立学習を促すようになった。
・授業のなかで，英文の内容理解を支援するための視聴覚教材を使用する機会が増えた（特に動画は生徒の反応がよかった)。

今後の課題（次の改善点など）

・第１回，第２回のテスト結果を比較すると，読む速度は上がり，すべての問題に解答できた生徒の数は増えたものの，読解の正確さは思ったよりも伸びなかった。
・ 概要や要点を掴むことに慣れ読む速度も上がったが，詳細の理解においては，英文の文構造を正確に把握しないまま内容語の理解と推測に頼り過ぎて誤解してしまうケースも授業場面で観察されたため，今後は，詳細理解の指導にも取り組みたい。
・ポストリーディングに位置づけた，レッスントピックに関連する初見英文の質に課題がある。語彙と文法のレベルが生徒たちにとって難しすぎたり，授業で学んだリーディングストラテジーをうまく生かして読み進めることができない英文を課してしまったりした。初見英文を準備するときには，レッスンのトピックに関連しているかを確認するだけでなく，ディスコースマーカー等が明確で，授業で習ったリーディングストラテジーを活用しながら読み進めることができるかを精査し，必要ならば語彙レベルを下げて，生徒に提示する必要がある。

まとめ・感想

11 年前の初任の頃からこの研修を受ける前まで，クラスが盛り上がることを最優先に，研修等で得た知識をもとに言語活動を組み立ててきた。ふり返ると，確かに授業中は表面的には活気があり，生徒も「面白い」と言ってくれた。しかし，それが直接目の前の生徒の力を伸ばすための手だてになっているかどうかを考えることは，ほとんどなかった。この 1 年間の研修は，授業の進め方や活動の導入法，ワークシートの提示のタイミングなど，すべての授業中の動き，準備のしかたについて見直すきっかけとなった。目の前の生徒にとって，何がベストなのかを考えることができた。アカデミアの先生方には，最後まで丁寧にカウンセリングをしていただき，英語教師として変わるきっかけを提供してくださったことに，感謝の気持ちでいっぱいである。

自律的な読みを促すリーディング指導の工夫

科目名	コミュニケーション英語Ⅰ	学 年	1	形 態	ＨＲ ・ 習熟度 ・ 小集団

クラスの特徴（男女比，雰囲気，進路など）

対象は 4 クラス，合計 158 名（男子 78 名，女子 81 名）の生徒である。英語の力の差は大きい。落ち着いた雰囲気で活動に取り組むクラスもあれば，楽しい雰囲気で活動するクラスもある。ほとんどの生徒が大学進学を希望している。

解決すべき課題

大学入試を目指して長文読解問題に取り組むが，苦手としている生徒が非常に多い。英文を一字一句日本語に訳しながら読む癖がついてしまっており，日本語訳がないと不安になってしまう傾向がある。また，語彙レベルの理解に集中しがちで文章全体のメッセージをとらえる力が育っていない。

事前の現状把握（アンケート，テストの結果など）

・第１回　授業アンケート（６月実施：回答者数 149）

１．この授業でどのような知識や力を伸ばしたいと思いますか（複数回答可）。

英語を聞く力	英語を話す力	英語を読む力	英語を書く力	単語や熟語の知識	文法の知識
90 人(60.4%)	103 人(69.1%)	57 人(38.3%)	76 人(51.0%)	38 人(25.5%)	61 人(40.9%)

２．英語を読む力はこれからの生活のなかで必要だと思いますか。

そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
87 人(58.4%)	52 人(34.9%)	7 人(4.7%)	3 人(2.0%)

＜分析と考察＞

４技能のうち，英語を話す力を伸ばしたい生徒が 69.1%いる一方で，英語を読む力を伸ばしたい生徒が 38.3%にとどまった。しかし，読む力の必要性については９割以上の生徒が必要だと感じており，英語を話す指導をしながら読む力の育成をすることが望ましいと考えられた。

・第１回　読解力テスト（６月実施：回答者数 154）

過去の英語検定準２級の長文読解問題を使って生徒の読解力を調べた。（問１～４は要点問題，問５は自作の概要問題１問の 5 点満点）

0 点	1 点	2 点	3～5 点	平均点
21 人(13.6%)	38 人(24.7%)	34 人(22.1%)	61 人(39.6%)	2.1

問題タイプ別の結果分析：要点問題（問１～４，0~4 点），概要問題（問５，１点）

要点問題の平均点と正解率
1.7 (42.2%)

概要問題	正解	不正解
得点人数(割合)	62 人(40.3%)	92 人(59.7%)

＜分析と考察＞

この時点で，英検準２級の長文問題に 6 割(3 問)以上正解した生徒は 4 割を下回っていた。問題タイプ別の結果を見ると，概要・要点問題ともに正解率は 4 割程度で，全般的に英文読解力を高める必要性が感じられた。

リサーチ・クエスチョン

日本語訳に頼らずに初見の英文の概要や要点を読み取る力を身につけるには，どのような指導をすればよいか。

改善の目安：英検準２級レベルの長文読解問題に 6 割以上正解する生徒が全体の 7 割を超える。

改善のための手だて

○ プレリーディング活動を工夫すれば，自分の力で英文を読もうとする意識が高まるだろう。

・絵や図を用いたオーラルイントロダクションを行う。スライドを用いて提示するだけでなく，英単語や英文を聞いて生徒に絵や図を描かせる活動を取り入れる。

・トピックに関連した話題について，本文に出てくる単語や表現を用いた，会話活動（ペアワーク）に取り組ませる。

○ 文構造を把握するための読解ストラテジーを指導すれば，自分の力で英文を読み進めることができるようになるだろう。

・主動詞を特定する練習を行う。

・接続詞の働きや修飾構造を理解させる。

○ 教科書英文の読解に際し，リーディングタスクの工夫をすれば，より的確に概要・要点をつかめるようになるだろう。

・できるだけ本文の単語を使わずに本文の要点を問う英問を出題する。

・パラフレーズした空所補充サマリーなどの要約活動を与える。

生徒の変化（途中経過，事後の検証結果など）

・第２回　授業アンケート（１２月実施：回答者数 150）

１．英語を読むことについて，どのようなものを読めるようになりたいですか。すでにできていると思うこと以外で，1～2 個選んでください。

観光案内やレストランのメニュー	SNS の投稿文	一連の作業のための説明や料理のレシピ	興味のある物語など	身近な話題に関する新聞・雑誌の記事など	社会的な問題に関する新聞・雑誌の記事など
45 人(30.0%)	78 人(52.0%)	19 人(12.7%)	65 人(43.3%)	36 人(24.0%)	22 人(14.7%)

２．英語を読む力はこれからの生活のなかで必要だと思いますか。

そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
103 人(68.7%)	37 人(24.7%)	5 人(3.3%)	5 人(3.3%)

＜分析と考察＞

どのようなものを読めるようになりたいか，というアンケートは第１回でも行っていた。その際は SNS の投稿文が 41.2%，観光案内やレストランのメニューが 40.5%を占めていた。しかし，第２回では SNS の投稿文が 52.0%，興味のある物語などが 43.3%と，読みたいものの対象が変化している。英語を読む力の必要性については，「そう思う」と答えた生徒の割合が約 7 割に上昇したことから，授業を通して読むことの楽しさを感じ，英文を理解できたという自信を持てるようになったと考える。

・第２回　読解力テスト（１２月実施：回答者数 149）

過去の英語検定準２級の長文読解問題を使って生徒の読解力を調べた。（問１～４は要点問題，問５は自作の概要問題１問の 5 点満点）

0 点	1 点	2 点	3～5 点	平均点
4 人(2.7%)	36 人(24.2%)	33 人(22.1%)	76 人(51.0%)	2.6

問題タイプ別の結果分析：要点問題（問１～４，0~4 点），概要問題（問５，１点）

要点問題の平均点と正解率
2.0 (50.0%)

概要問題	正解	不正解
得点人数(割合)	82 人(55.0%)	67 人(45.0%)

＜分析と考察＞

前回と同じレベルの長文問題を用いたが，合計点が 0 点の割合が前回は 13.6%だったのに対し，今回は 2.7%まで減少したことは大きな成果であると考える。また，概要問題の正答率も前回より上昇したことから，全体の話の流れを読み取る力がついた生徒が増えたと推察される。残念ながら「6 割以上正解する生徒が全体の 7 割を超える」という改善の目標には達しなかったが，緩やかではあるものの，生徒の読解力の向上傾向は見られた。

<u>教師の変化</u>

・教科書本文に出てくる単語をできるだけ使わずに要点問題を作成するために，既習範囲を確認するようになった。

・概要タスクを設定するため，今までよりも教科書を読み込むことで，授業展開を工夫したり伝えたいポイントを絞ったりするようになった。
・生徒自身で英文を落ち着いて読ませる時間を多くとるようになった。
・授業のなかで，活動の前に，それをなぜするのか，それをすることでどのようなことにつながるのかを生徒に伝えるようになった。

今後の課題（次の改善点など）

・読解の活動をさせるなかで，生徒の語彙力や文法知識が不足している生徒には難しい活動だったと感じた。語彙力の定着方法や，文法知識を広げる工夫が必要である。
・授業展開として，読解させることを重視したため，コミュニケーション活動が乏しくなってしまうことがあった。読解を中心に据えつつ，コミュニケーション活動をできるだけ取り入れるにはどのようにしたらよいかを考えたい。
・明確な指導目標と，目標への到達度を測るテストや評価を事前に立案したうえで，授業の構成を考えていきたい。その際，担当者全員で話す機会を設けたり，統一のプリントなどを準備したりできれば，生徒にもより明確なポイントを示しながら授業を行えると考えている。
・CAN-DO リストの内容を再設定する。生徒の能力や今後伸ばしたい力を英語科のなかで共通認識するだけでなく，CAN-DO リストを踏まえて 3 年間の授業の構成を考える必要がある。

まとめ・感想

アクション・リサーチを通して，私自身の授業に対する考え方や姿勢が変わった。教科書を読む際，英文の言語的側面や文字通りの意味に着目して授業をしてきたが，英文が伝えようとしている重要なメッセージや筆者の意図を生徒と一緒に考えるようになった。「文が読めると楽しいね」と言ってくれた生徒のそのことばは，アクション・リサーチを行っている私への励ましにもなった。また，職場の同僚性についても考える機会となった。現状は，日々の業務に追われて教員同士で話をする時間も十分に確保できていない。授業や生徒について研究協議を重ねることで教材研究や教員個人のスキルアップにつながっていくが，同僚性が薄れがちなために期待通りに進まないことが多い。現在は，同一科目の担当者同士で共通実施の活動を考えるにとどまっているが，いずれはその領域を増やしていきたい。

今回のアクション・リサーチでは，約半年後を見据えて日々の授業をどのように行うかを考えてきた。どの場面でも生徒一人ひとりが自分でできることを増やさなければならないと考えているので，生徒ができることや教師が手助けすることを考えながら，今後も日々の授業を充実させたい。

授業改善にあたって参考にした資料等

小林　翔. (2018).『高校英語のアクティブラーニング　生徒のやる気を引き出すモチベーション・マネジメント 50』明治図書出版株式会社

速読即解を目指したリーディング指導

科目名	コミュニケーション英語Ⅲ	学 年	3	形 態	ＨＲ ・ 習熟度 ・ 小集団

クラスの特徴（男女比，雰囲気，進路など）

対象は２クラス，合計 80 名（男子 29 名，女子１名）の生徒である。授業においては，こちらから投げかける質問に対して，半分程度の生徒が自発的に答えようとしているものの，英文法に対して苦手意識を持っている者が多い。しかし，生徒の多くは，４年制大学への進学を希望しているため，長文の読み方や英文法の知識の習得に対して，非常に意欲的に学習を行っている。

解決すべき課題

「英文を自力で読めるようになりたい」という生徒が多いため，授業で特に英文読解力を身につけさせたい。しかし，初見の英文を読み，その内容を理解することに対しては苦手意識を持つ生徒が多い。英文を読むための基礎的な技能を身につけさせ，英文読解に対する自信を高めたい。

事前の現状把握（アンケート，テストの結果など）

・英語学習に関するアンケート（５月実施：回答者数 77）

１．授業でどのような知識や力を伸ばしたいですか？（3 つまで選択可）

聞く力	話す力	読む力	書く力	語彙の知識	文法の知識
36 人(46.8%)	37 人(48.1%)	53 人(68.8%)	23 人(29.9%)	34 人(44.2%)	31 人(40.3%)

２．英語を読む力はこれからの生活のなかで必要だと思いますか？

そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらかといえば そう思わない	そう思わない
55 人(71.4%)	19 人(24.7%)	3 人(3.9%)	0 人(0.0%)

・第１回リーディングテストの結果（６月実施：受験者数 76）

現時点での英文読解力を調べるために，英検２級の長文読解問題（３C）から 5 問出題した（1 問 1 点）。なお，明確な制限時間は設けなかった。

平均点	標準偏差	最高点(5 点)	最低点(0 点)	6 割以上正解
2.7	1.36	7 人	4 人	41 人（5.4 割）

＜分析と考察＞

５月に実施した第１回アンケート調査の結果，約７割の生徒が，授業で特に「読む力」を伸ばしたいと考えており，「読む力」を重点的に指導することの必要性をあらためて感じた。また，６月に実施した第１回リーディングテストでは，6 割以上（3 問以上）正解した生徒は半数を少し上回る程度であった。このことから，英検２級レベルの英文を自分の力で読み，その概要や要点を一読してとらえる力の育成が必要であることを再認識した。この初回のテストでは，英文全体を読み終えてからの読解力を測定するために，明確な時間制限を設けなかった。しかし，次回以降のリーディングテストでは，大学受験を考えている生徒が多くを占めていることを考慮して制限時間を設けるとともに，与えられた時間内に英文全体の概要や要点を把握し，設問に解答することができるようにするための指導を工夫する必要があると感じた。

リサーチ・クエスチョン

英検２級レベルの英文を自分の力で読み，その概要や要点を一読してとらえる力を身につけさせるにはどのような指導をすればよいか。

改善の目安：・英検２級レベルの長文読解問題に 6 割以上正答できる生徒が全体の 7 割以上になる。
・アンケート調査で「英文読解の力がついた」と感じる生徒が全体の 7 割以上になる。

改善のための手だて

○ テキストタイプに応じた読解のしかたを指導し，英文の内容をより的確かつ効率的に理解することができるようになるだろう。
・評論であれば，筆者の主張を順序だてて理解する，物語文であれば，人称と時制に注意しつつ，登場人物とそこで話題となっている事柄を把握するなど，未知語や文構造に過度にとらわれず，文全体の流れや論理展開，筆者の主張を追いながら読むことをくり返し指導する。

○ 教科書英文の読解タスクを工夫すれば，的確に内容を読み取るスキルが向上するだろう。
・教科書の英文読解に際し，概要理解，要点理解のタスクに取り組ませる。

○ 初見の英文読解に時間制限を設けて取り組ませれば，速く読むことへの意識が高まるとともに，長文読解に対する抵抗感が少なくなるだろう。
・定期的に英検２級レベルの長文問題や，やや易しめの入試長文問題を授業のなかで扱う。
・完読に必要な WPM(150 程度)をもとに制限時間を設け，素早く内容理解をする意識づけをする。

○ リーディングストラテジーを指導し練習させれば，自分の力で読もうとする態度が身につくだろう。
・スキミングやスキャニングなどのリーディングストラテジーを明示的に指導する。
・ストラテジーを使わせるように，教科書の英文読解のためのワークシートを工夫する。

生徒の変化（途中経過，事後の検証結果など）

・第２回リーディングテストの結果（８月実施：受験者数 73）＊中間測定

15 分の制限時間内に複数の英文に取り組ませるため，英検２級の長文読解問題（３C）に加えて，より基礎的なレベルの英検準２級の長文読解問題（４B）も出題し，計 9 問のテストとした。

[準２級パート]

平均点	標準偏差	最高点(4 点)	最低点(0 点)	6 割以上正解
2.9	1.10	27 人	2 人	46 人（6.3 割）

[２級パート]

平均点	標準偏差	最高点(5 点)	最低点(0 点)	6 割以上正解
1.7	1.29	3 人	15 人	18 人（2.5 割）

＜分析と考察＞

準２級の結果だけを見ると 6 割以上正解した生徒の割合が 6 割を超えているが，２級の問題に 6 割以上正解した生徒の割合は全体の 2.5 割となった。これは第１回から約 3 割近く下がったことになる。0 点の生徒の多さからも推察されるように，前回よりも急に問題数が増えたことで，最後までしっかり読めなかった生徒が多かったと思われる。これまでと同様にリーディングストラテジーを中心に指導しつつ，時間配分に留意しながら英文を読む意識を高めることが必要であると感じた。

・第３回リーディングテストの結果（１０月実施：受験者数 74）

第２回と同様にテストを実施し，一連の授業改善の成果としての生徒の読解力を調べた。

[準２級パート]

平均点	標準偏差	最高点(4 点)	最低点(0 点)	6 割以上正解
3.3	0.93	40 人	2 人	64 人（8.6 割）

[２級パート]

平均点	標準偏差	最高点(5 点)	最低点(0 点)	6 割以上正解
2.6	1.20	4 人	4 人	41 人（5.5 割）

＜分析と考察＞

準２級パートの問題に 6 割以上正解した生徒の割合が全体の 9 割近くまで増え，２級パートの問題に 6 割以上正解した生徒の割合も前回の 2.5 割から 5.5 割まで増加した。このことから，生徒が，複数の英文を制限時間内に読むことに，ある程度慣れてきたことがうかがえる。しかし，「英検２級レベルの長文読解問題に 6 割以上正答できる生徒が全体の 7 割以上になる」という目標は達成することができず，第１回と比較して平均点も伸びなかった。準２級パートについては，第２回・３回のデータがそろっている 70 人について検定（対応のあるデータの t 検定）を行ったところ，有意な向上が認められた（$p = 0.01 < 0.05$）。

教師の変化

教材研究をするうえで，適切なタスクを設定し必要な指導を見極めるために，英文を徹底して深く読むようになった。それにともない，授業準備により時間をかけるようになった。本研修で得た知見を授業内で実践していくことで，授業中の生徒の姿勢に大きな変化が見られた。そして，ともに英文読解に取り組むことで，一緒に授業づくりをしていると実感するようになった。

今後の課題（次の改善点など）

・未知語の推測のためには，その礎となる基礎的語彙の知識が不可欠であるため，ストラテジーの指導だけでなく，語彙力強化のための指導も工夫していきたい。
・速読教材等でさまざまなトピックの英文読解に取り組ませることで，さまざまな分野の背景知識や関連する語彙や表現を身につけさせ，トピックから内容を予測したり，難解な箇所があっても文脈から推測して読み進めたりするトップダウンのリーディング力を育成したい。

まとめ・感想

今回の授業改善では，生徒の英文読解力を向上させるために教材の英文を深く読みこむことで，結果的には，自分自身の読解力も向上させることができたと思う。毎回参加した研修はとても新鮮で，新たな発見や気づきが多々あり，授業改善をしていくうえでのさまざまなアイディアやヒントを得ることができた。また，生徒に身につけさせたい力が何であるかを明確にし，どのような指導法が，目的を達成させるうえで必要とされるのかを，絶えず思索することが重要であることに気づくことができた。こうしたいくつもの気づきのなかで，自分の指導の方向性が徐々に明らかになっていった。今後も，生徒の英語力向上のために，自己研さんに努めていきたいと思う。これまで，勤務校の英語の先生方からも多くの助言を頂いたが，今後は，これまで以上に組織的指導力向上に貢献し，後続の教師にとっての指針となれるよう努力していくつもりである。最後に，このような機会を頂けたこと，また，ご指導，ご支援をして頂いたアカデミアの先生方に心から感謝を申し上げたい。

授業改善にあたって参考にした資料等

卯城 祐司. (2011).『英語で英語を読む授業』研究社

プレリーディング活動による支援を工夫した読解指導

科目名	コミュニケーション英語Ⅰ	学 年	1	形 態	ＨＲ ・ 習熟度 ・ 小集団

クラスの特徴（男女比，雰囲気，進路など）

対象は 4 クラス 139 名（男子 87 名，女子 52 名）の生徒である。真面目に授業に取り組んでおり，ペアワークやグループワークにも前向きに行う生徒が多い。その一方で，入学試験の結果や授業中の様子から，中学校既習の基礎的な語彙や文法の知識が十分に身についていないことがうかがえる。約 75%の生徒が各種上級学校(大学，短大大学，専門学校)への進学を希望しているが，例年その多くが推薦入試での進学である。

解決すべき課題

単語一つひとつの意味を思い出すだけで時間を要する生徒が多く，断片的な理解にとどまるために，正確に英文を読むことができない。また語彙力や文法知識が乏しいため，英文を目の前にするとあきらめてしまう生徒も多い。基礎的な語彙・文法の知識の定着を促しながらも，未知語の意味にとらわれることなく，パッセージの概要やパラグラフの要点を的確につかむ力を身につけさせたい。

事前の現状把握（アンケート，テストの結果など）

・第１回　読解力テスト（７月実施：受験者数 125）

過去の英語検定３級の長文読解問題（３－Ｃ）を使って生徒の読解力を調べた。設問 5 問を制限時間 15 分で実施した（5 点満点)。

受験者数	平均点	最高点	最低点	標準偏差	6 割以上正解者
125 人	2.9 点	5 点	0 点	1.63	79 人(63.2%)

	Q1	Q2	Q3	Q4	Q5
正答人数(人)	90	72	70	70	68
正答率(%)	72.0	57.6	56.0	56.0	54.4

＜分析と考察＞

合格ラインとされる 6 割以上(3～5 問)正解者は，全体の約 63%であった。満点の生徒が 29 人いる一方で，0 点の生徒が 13 人いた。点数が取れなかった生徒は日頃から英語に対する苦手意識が強く，最初から長文を読むのをあきらめていた。多くの生徒が，知識不足を補いながら英文を読み進められるような支援が必要だと感じた。また，Q5 の概要問題の正答率が低いことから，授業のなかで，パ

ラグラフの要点をつかむ練習はしてきたが，パッセージ全体の概要をとらえる練習を十分にしてこなかったことを再認識した。

・第１回　授業アンケート（７月実施：回答者数 125）

１．英語の長文を読むことに自信がありますか。

自信がある	どちらかといえば自信がある	どちらかといえば自信がない	自信がない
5 人(4.0%)	21 人(16.8%)	49 人(39.2%)	50 人(40.0%)

２．初めて読む英文の概要・要点を理解する自信はありますか。

自信がある	どちらかといえば自信がある	どちらかといえば自信がない	自信がない
7 人(5.6%)	24 人(19.2%)	48 人(38.4%)	46 人(36.8%)

＜分析と考察＞

読解力テストにおいて，6 割以上正解者は全体の約 63%であるにもかかわらず，長文を読むことや概要・要点を理解することに（どちらかというと）自信がない生徒が全体の約 75～79%いることが確認できた。自信のなさは英語に対する苦手意識から来ると考え，基礎的な知識の定着を図りつつ，英文全体のメッセージをとらえるスキルを身につけさせる活動・授業展開が必要だと考えた。

リサーチ・クエスチョン

英検３級レベルの長文を自分の力で読み，その概要・要点を的確にとらえる力を身につけさせるには，どのような指導をすればよいか。

改善の目安：英検３級レベルの長文読解問題で，6 割以上正答できる生徒が全体の 7 割以上になる。

改善のための手だて

○　教科書英文の読解に際し，支援の工夫をすれば，積極的に英文読解に取り組むようになるだろう。
　・クイズやオーラルインタラクションを行い，英文の内容に興味を持たせる。
　・画像などを用いて語彙や本文内容の導入を行う。
　・生徒にとって難しいと思われる表現を，平易な表現で書き換えた英文を用いて理解させる。

○　教科書英文に関する読解タスクを工夫すれば，的確な内容理解ができるようになるだろう。
　・パッセージの概要や筆者の意図，パラグラフの要点を読み取るタスクを設定する。
　・パートの概要を簡単な英文１文で書かせる。

○　初見の英文読解に取り組ませれば，動機づけと自信につながるだろう。
　・英語検定３級の長文読解問題に複数回取り組ませる。

生徒の変化（途中経過，事後の検証結果など）

・第２回　読解力テスト（１２月実施：受験者数 130）

第１回と同じ形式で，英語検定３級の長文読解問題（３―Ｃ）を使って生徒の読解力を調べた。

受験者数	平均点	最高点	最低点	標準偏差	6割以上正解者
130 人	3.8 点	5 点	1 点	1.33	100 人(76.9%)

	Q1	Q2	Q3	Q4	Q5
正答人数(人)	104	97	89	95	86
正答率(%)	80.0	74.6	68.5	73.1	66.2

＜分析と考察＞

第１回目と比べ，6 割以上(3～5 問) 正解者が 63.2%から 13.7%増え，76.9%になり改善の目安に到達した。また，平均点も各設問の正答率も上昇している。特筆すべき点は，第１回では無得点の生徒が 13 人(10.4%)いたが，第２回目ではいなくなったことである。また，個々の生徒の伸びについて t 検定（対応のあるデータ）を行ったところ，有意差が認められた（$p = 0.00 < 0.05$)。Q5 の正答率が他の設問より低いのは，概要把握の力を高めるための取組への着手が遅く，練習が不十分であったためと考えられる。

・第２回　授業アンケート（１２月実施：回答者数 130）

１．英語の長文を読むことに自信がありますか。

自信がある	どちらかといえば自信がある	どちらかといえば自信がない	自信がない
19 人(14.6%)	41 人(31.5%)	42 人(32.3%)	28 人(21.5%)

２．初めて読む英文の概要・要点を理解する自信はありますか。

自信がある	どちらかといえば自信がある	どちらかといえば自信がない	自信がない
12 人(9.2%)	34 人(26.2%)	46 人(35.4%)	38 人(29.2%)

※質問３～５については第２回アンケートでのみ実施

３．１学期またはそれ以前に比べて，英文の読解のしかたはわかるようになってきましたか。

わかる	どちらかといえばわかる	どちらかといえばわからない	わからない
19 人(14.6%)	71 人(54.6%)	22 人(16.9%)	18 人(13.8%)

４．画像を用いた語彙や本文の導入は，内容理解に役に立ちますか。

役に立つ	どちらかといえば役に立つ	どちらかといえば役に立たない	役に立たない
28 人(21.5%)	83 人(63.8%)	12 人(9.2%)	7 人(5.4%)

５．授業のプリントは，英文の概要・要点を理解するうえで役に立ちますか。

役に立つ	どちらかといえば役に立つ	どちらかといえば役に立たない	役に立たない
29 人(22.3%)	75 人(57.7%)	18 人(13.8%)	8 人(6.2%)

＜分析と考察＞

第２回読解力テストにおいて点数が伸びた生徒が多いが，長文読解に対する自信は全体としてまだ十分に高まっていない。特に，初めて読む英文の概要・要点を理解することに（どちらかというと）

自信がない生徒の割合が 64.6%と依然として高い。初見の英文に取り組ませる機会が少なかったのと，読解ストラテジーの指導の時間が不十分だったのが原因である。それでも，事前・事後データがそろっている質問１と質問２を Wilcoxon の符号付き順位検定にかけたところ，有意差が認められた（$p = 0.00$，$0.04 < 0.05$)ことから，少しずつ自信は上向いてきていると思われる。また，画像を用いた語彙や本文の導入と授業のプリントにおける英文の概要・要点をつかむ取組に対して，8 割以上の生徒が役に立つと答えているので，これらの取組は継続して行いたい。

教師の変化

・データによって客観的に生徒の現状を知り，長期的な視点に基づいた目標を立て，生徒の英語力の向上につながる効果的な取組を考えて，実行することで，授業改善の方法を体験的に理解できた。
・プレリーディング活動を充実させるために，今まで以上に前向きに教材研究にことができた。また，研修や書籍から学んだことを積極的に授業に取り入れることができた。

今後の課題（次の改善点など）

・読解後に概要を自分の力で適切に表現できるようにするための，効果的な指導方法を確立させたい。
・授業で習得した知識や技能の力試しができるように，初見の英文を読む機会を増やし，英文を読むことへの自信を持たせたい。
・オーラルインタラクションの場面で，生徒とのやり取りを円滑に行い，自分の気持ちや考えを英語で表現できた時の達成感を味わわせたい。

まとめ・感想

アクション・リサーチの手法を用いることで，必要な指導・活動や生徒に身につけさせたいことが浮き彫りになり，教材研究や授業を以前に増して意欲的に行うことができた。特に画像を用いた語彙や本文の導入を中心に，内容理解につながるプレリーディング活動の充実に力を入れた。慣れない ICT の活用で授業準備に時間がかかったが，英語に苦手意識を抱える生徒が集中して授業に臨んでいる姿を見ることで，授業準備の苦労は吹き飛んだ。3 年間を見据えた段階的な指導の大切さがわかったので，現在次年度に向けて，指導目標と内容の確認を担当者同士で協力して行っている。当初は研修を最後までやり遂げられるか不安であったが，他校の先生方の情熱や前向きな姿勢に励まされた。また，アカデミアの先生方から的確なアドバイスをいただけたことや，豊富な知識や指導技術を得たことは大きな財産になった。研修で学んだことを生徒に還元していくとともに，これからも自己研さんに努めて生徒のために学び続ける教師でいたい。貴重な研修の機会を与えていただいたことに感謝申し上げる。

授業改善にあたって参考にした資料等

門田修平・野呂忠司・氏木道人(編著). (2010).『英語リーディング指導ハンドブック』大修館書店

まとまりのある意見文を書く力を育てる指導

科目名	コミュニケーション英語Ⅲ	学 年	3	形 態	ＨＲ ・ 習熟度 ・ 小集団

クラスの特徴（男女比，雰囲気，進路など）

対象は 3 クラス 102 名（男子 41 名，女子 61 名）の生徒である。授業以外での学習習慣が身についておらず，英語が得意であるといえる生徒は少ないが，一方で英語に興味・関心のある生徒が多く，特に活動の多い授業には積極的に取り組むことができる。学年の約 9 割の生徒が大学・短大・専門学校に進学するが，AO 入試や推薦入試によるものが大多数である。

解決すべき課題

英語に興味・関心を持つ生徒が多いため，ペアワークやグループワークに積極的に取り組む姿勢がみられる。しかし，英語の発話や記述内容を観察すると，内容にまとまりがなく，意味の理解に支障をきたすエラーが多い。明示的な指導を行うとともに，自己表現の機会を増やすことで改善の支援をしたい。

事前の現状把握（アンケート，テストの結果など）

・アンケート調査（6 月：回答者数 90）

＊英語を書く力はこれからの生活のなかで必要だと思いますか？

そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらかといえば そう思わない	そう思わない
52 人（57.8%）	33 人（36.7%）	5 人（ 5.6%）	0 人（ 0.0%）

＜分析と考察＞

9 割以上の生徒が英語を書く力の必要性を認識していることがわかった。授業改善のテーマとしてライティング能力の向上を取り上げることについて，生徒の賛同が得られそうだとあらためて感じた。

・第 1 回　ライティングテスト（7 月実施：受験者数 86）

＊トピック「こどもは自然のなかで過ごすべきか」（制限時間 15 分）

生徒のライティング力を測定するために，自由英作文のテストを実施し，「内容」・「構成」・「正確さ」の評価項目からなるルーブリックを用いて評価した。生徒には 50 語以上書くこと，理由と例を入れること，S+V 構造や接続詞，時制のエラーには特に注意するよう助言した。現時点での実力を見るために，事前にルーブリックについての詳細な説明は行わなかった。

＊評価ルーブリック

	内容	構成	正確さ
A (5 点)	内容に一貫性があり，例・理由などによって深められている。	序論 - 本論 - 結論の構成が確立し，さらに結論に工夫が見られる。	内容伝達に支障をきたす誤りがない。
B (3 点)	内容に一貫性がある。	序論 - 本論 - 結論の構成が確立している。	内容伝達に支障をきたす誤りが 1 つある。
C (1 点)	内容に一貫性がない。	序論 - 本論 - 結論の構成が確立していない。	内容伝達に支障をきたす誤りが 2 つ以上ある。

＊結果

内容			構成			正確さ		
A	B	C	A	B	C	A	B	C
30 人 (34.9%)	46 人 (53.5%)	10 人 (11.6%)	11 人 (12.8%)	43 人 (50.0%)	32 人 (37.2%)	20 人 (23.3%)	28 人 (32.6%)	38 人 (44.1%)

生徒 1 人当たりの平均語数：60.8 語

＜分析と考察＞

「内容」「構成」「正確さ」の項目で評価したところ，全項目で B 以上の評価となった生徒は 34 人(29.2%)であった。「内容」に関しては B 以上が 88.4%と，特に高い水準にあったこと。これは，1 年生の頃よりスピーキング，ライティング活動の際に，論理的に述べることをくり返し指導してきた成果であると考えられる。しかし，B 評価については，一貫性はあるものの，理由や例による内容の深化がなく無味乾燥な文になっているものがほとんどであった。「構成」における序論 - 本論 - 結論の構成が確立していない生徒が 32 人(37.2%)と多く，同時に，序論 - 本論 - 結論の構成が確立していて，さらに結論に工夫が見られる生徒が 11 人(12.8%)と非常に少なかった。「内容」「構成」については，型の明示的な指導と反復により，改善が見込まれるのではないかと考えた。また，「正確さ」においては，38 人(44.1%)もの生徒が，内容伝達に支障をきたす誤りを 2 つ以上していることから，指摘する誤りを絞って，くり返しフィードバックをする必要があると考えた。

<u>リサーチ・クエスチョン</u>

身近な話題について基本的な表現を使ってまとまった分量の意見を書けるようにするにはどのような指導をすればよいか。

改善の目安：与えられたトピックに関する意見を書く英作文テストにおいて，8 割以上の生徒が「内容」「構成」「正確さ」すべての項目で B 以上の評価となる。

改善のための手だて

○ 身近なことがらについて説得力のある意見を述べ合う会話活動を継続すれば，まとまりのある内容の英語を発信ができるようになるだろう。
・毎授業，帯活動として身近なことがらについてペアで話す活動を行う。
・It is because, As a result など論理的に述べるための表現を指導し，それらを使用するよう促す。

○ 意見文の構成を明示的に指導すれば，より英語らしいパラグラフが書けるようになるだろう。
・パラグラフの基本的な構造（主題文・支持文・結論文）を指導する。

○ 限定した文法項目についてくり返し添削指導すれば，理解に支障をきたす誤りが少ない英文が書けるようになるだろう。
・週に１度，身近なことがらに関するライティングを実施する。
・添削は S＋V 構造，従属接続詞，時制に関してのみ行う。
・内容について共感や称賛のコメントを与え，書くことに対する意欲の促進を図る。

生徒の変化（途中経過，事後の検証結果など）

・第２回　ライティングテスト（１２月実施：受験者数 86）
＊トピック「親はこどもにテレビゲームをさせてよいか」（制限時間 15 分）
＊結果

内容			構成			正確さ		
A	B	C	A	B	C	A	B	C
71 人 (82.6%)	12 人 (14.0%)	3 人 (3.4%)	39 人 (45.3%)	35 人 (40.7%)	12 人 (14.0%)	40 人 (46.5%)	27 人 (31.4%)	19 人 (22.1%)

生徒１人当たりの平均語数：78.0 語

＊「内容」「構造」「正確さ」全項目が B 以上になった生徒数(割合)の比較

第１回（７月）	第２回（１２月）
34 人（29.2%）	61 人（70.9%）

＜分析と考察＞

項目別にみると，「内容」については第１回テストの段階で B 評価以上が 8 割を超えていたが，簡素で独自性を感じることのできない文が多かった。第２回では，A 評価の人数が 30 人(34.9%)から 71 人(82.6%)へ増加し，「構成」についても B 評価以上の生徒が 54 人(62.8%)から 74 人(86.0%)に増加した。これらは，理由や例，主題文・支持文・結論文の書き方を明示的に指導したことと，毎回のスピーキング活動の成果であると思われる。「正確さ」については B 以上の評価を取った生徒が 48 人(55.9%)から 67 人(77.9%)に増加した。しかし，C 評価を取った生徒も他の観点と比較すると多数存在した。理由としては，作文の平均語彙数の増加（60.8 語→78.0 語）にともなって，エラー数も増えたということが考えられる。限定した文法項目であっても，週１度のフィードバック（添削）ではなかなか改善されないことから，個別のフィードバックと同時に，説明や演習の時間を設けることが必

要であると感じた。8 割以上の生徒が「内容」「構成」「正確さ」すべての項目で B 以上の評価になる，という目標は達成できなかったが，項目別の評価データを検定（Wilcoxon の符号付き順位検定）にかけたところ，すべての項目の評価に有意な向上が認められた（$p = 0.00 < 0.05$）。

教師の変化

生徒に取り組ませていることが，本当に力になっているのかという不安を持ち続けていたが，身につけさせたい力を明確にし，それに向けて具体的な手だてを考え，実践して検証するという一連のサイクルを学ぶことにより，授業改善の取り組み方を学ぶことができ，指導に自信を持つことにつながった。

今後の課題（次の改善点など）

「内容」「構成」に関しては，理由や例，主題文・支持文・結論文の書き方を明示的に指導することで，型を身につけさせることができたと感じている。アンケートでも「以前よりも伝わるような文章を書けるようになったと思う」「英文を書くのが苦手だから，文章を作るのは今でも難しいけれど，前よりは内容が書けるようになったし，語数がとても増えた」「1 年を通して本当にたくさん書けるようになった」等のコメントがあった。一方で，「言いたい内容を考えると，どうしても単語や熟語の不足を感じてしまう」というような，ライティングにおける語彙不足に言及している生徒も散見され，語彙指導についても再考する必要を感じた。「正確さ」については，特に C 評価だった生徒たちに対して，基礎文法のやり直しと反復練習を行うことで，内容理解に支障をきたすエラーを減らしていきたい。また，今後，勤務校において，アクション・リサーチの有用性を伝え，同僚とともに実践をしていくことで，組織的な授業改善を図っていきたい。

まとめ・感想

今回の授業改善プロジェクトを通じ，勘や感覚で授業をしている自分の無責任さに気づいた。観察とともに，データに基づいて生徒のつまずきやニーズを知り，身につけさせたい力を明確にし，目標や授業方法の意図を共有することこそが生徒に寄り添った授業なのだと思った。週に約 100 枚の英作文の添削をすることは非常に負荷が大きいと感じていたが，最初は無味乾燥だった生徒たちの作文が，少しずつ思いや感情などの個性を放ち始め，添削することが楽しいと感じるようになった自分も発見した。最後に，この研修に参加できたことに心から感謝するとともに，教師として，英語の授業を通して人を育てるという視点を持ち続け，自己研さんに努めていきたい。

授業改善にあたって参考にした資料等

安彦忠彦(編著). (2014).『「コンピテンシー・ベース」を超える授業づくり』図書文化
三浦孝　弘山貞夫　中嶋洋一(編著). (2002).『だから英語は教育なんだ』研究社
西川　純(編著). (2016).『資質・能力を最大限に引き出す！『学び合い』の手引き』明治図書
和泉伸一(編著). (2016).『フォーカス・オン・フォームと CLIL の英語授業』アルク
田畑光義・松井孝志・大井恭子(編著). (2008).『パラグラフ・ライティング指導入門』大修館書店

ディベート活動を利用したライティングの指導

科目名	コミュニケーション英語Ⅱ	学 年	2	形 態	ＨＲ ・ 習熟度 ・ 小集団

クラスの特徴（男女比， 雰囲気， 進路など）

対象は１クラス，39 名（男子 25 名，女子 14 名；後期は男子１名留学のため計 38 名）の生徒である。英語は受験のために必要だと捉えているが，英語を得意と答える生徒は非常に少ない。授業中自主的に発言する生徒はいない。しかし， ペア活動やグループ活動を行うと，活発に質問したり，意見を交換したりする様子が見られる。大学進学については，理系志望が 50%，文系志望（世界史選択者）が 50%である。

解決すべき課題

大学入試で問われることの多い意見文を書かせると，自分の意見を明確に書けない生徒が多い。具体的には，漠然と自分の経験のみが書かれて，主張が曖昧であったり，AREA と呼ばれる，assertion（主張），reason（理由）および example（具体例）に基づく論理的一貫性が欠如していたりする作文が多く見られる。

事前の現状把握（アンケート， テストの結果など）

・アンケート調査（５月実施：回答数 39）

１．あなたは英語の学習が好きですか，嫌いですか？

好き	どちらかといえば好き	どちらかといえば嫌い	嫌い
12 人（30.8%）	16 人（41.0%）	9 人（23.1%）	2 人（ 5.1%）

２．あなたは英語が得意だと思いますか，苦手だと思いますか？

得意	どちらかといえば得意	どちらかといえば苦手	苦手
2 人（ 5.1%）	12 人（30.8%）	9 人（23.1%）	16 人（41.0%）

３．グループでする活動についてどう思いますか？

好き	どちらかといえば好き	どちらかといえば嫌い	嫌い
9 人（23.1%）	26 人（66.7%）	3 人（ 7.7%）	1 人（ 2.6%）

＜分析と考察＞

「英語が（どちらかといえば）好き」と答える生徒が 70%を超える一方で，「(どちらかといえば)嫌い」と答える生徒も 28.2%存在する。「苦手」と感じる生徒も 64.1%存在する。しかし，クラスメートとのグループ活動を好む生徒が 89.8%存在するため，協働的な学びのなかでライティングの力を伸ばせないか考えた。

・ライティングテスト（５月実施：回答数 39）

生徒の現時点でのライティング力を知るために，前期中間試験において下記の論題について，ふだんから授業で取り組んでいる Parliamentary Debate のフォーマットにしたがい，提示された賛成側（government team）のスピーチに対し，ディベートの反対側(opposition team)の立場から，反論および自説の理由を 80 語以上で書かせる問題を出題し，下のルーブリックに基づき評価した。

論題：The use of smartphones on the street should be banned in Japan.

ルーブリック：

	構成	自説の理由	反論
A	序論―本論―結論の構成が確立している。結論に工夫がみられる。	自説の理由と具体例に一貫性がある。	相手の主張の引用と反論が対応している。
B	序論―本論―結論の構成が確立している。	理由もしくは具体例の一方が欠けているか一貫性がない。	相手の主張の引用もしくは反論の一方が欠けているか，　対応していない。
C	序論―本論―結論の構成が確立していない。	理由，具体例ともにない。	引用，反論ともにない。

評価結果：

	構成		自説の理由		反論	
	人数	%	人数	%	人数	%
A	0	0.0%	16	41.0%	10	25.6%
B	27	69.2%	15	38.5%	18	46.2%
C	12	30.8%	8	20.5%	11	28.2%

＜分析と考察＞

自説の理由の観点で，評価結果 B の答案は，AREA の構成の reason と example が対応していなかったり，example のみを漠然と書き，reason の記述がなかったりするものが多かった。反論について，評価結果 B の答案には，相手の主張に対して反論が対応していないか，無関係な自説の理由を述べている答案が多く見られた。

<u>リサーチ・クエスチョン</u>

社会的な話題について，論理的で一貫性のある意見文を書く力を身につけさせるには，どのような指導をすればよいか。

改善の目安：１２月の定期試験作文問題において，AREA の構成で意見文を論理的に書ける（ルーブリックの「自説の理由」「反論」の項目で A 評価の）生徒が，全体の 7 割以上になる。

<u>改善のための手だて</u>

○ 社会的な話題について意見交換をする活動を継続すれば，異なる意見や考え方を踏まえた自分の意見を形成できるようになるだろう。

・教科書の reading 教材について，自分の意見を述べる speaking 活動を行う。その際に AREA を

組み立てる練習をする。また，各単元の終わりにディベート活動を行い，自説の理由および反論を論理的に述べる練習をさせる。

○ 意見文の構成を明示的に指導すれば，より論理的で説得力*のあるエッセイを書けるようになるだろう。（*説得力：reason と example に論理的一貫性があること）

・ディベート活動前に効果的な反論方法について構成を明示して練習させる。ディベート活動後に，AREA の構成を明示して，自説の理由と反論を述べる writing 活動を行う。

<u>生徒の変化（途中経過，　事後の検証結果など）</u>

・アンケート調査（１２月実施：回答数 38）

１．あなたは英語の学習が好きですか，嫌いですか？

好き	どちらかといえば好き	どちらかといえば嫌い	嫌い
14 人（36.8%）	16 人（42.1%）	7 人（18.0%）	1 人（ 2.6%）

２．あなたは英語が得意だと思いますか，苦手だと思いますか？

得意	どちらかといえば得意	どちらかといえば苦手	苦手
2 人（ 5.3%）	12 人（31.6%）	13 人（34.2%）	11 人（28.9%）

３．グループでする活動についてどう思いますか？（無回答１）

好き	どちらかといえば好き	どちらかといえば嫌い	嫌い
3 人（ 8.1%）	24 人（64.9%）	9 人（24.3%）	1 人（ 2.7%）

＜分析と考察＞

「英語が（どちらかといえば）好き」と答える生徒が 71.8%から 78.9%とわずかに増えた。しかし，「グループ活動が（どちらかといえば）好き」と答える生徒が 89.8%から 65.9%に減った。その理由として，「自分の英語力がクラスメートより劣っていることがわかる」や「自分の英語力がないと迷惑がかかる」という記述が見られた。この数か月間で語彙力の差が大きくなり，社会的なトピックについて話せる生徒が増えた一方で，言いたいことを言えず歯がゆい思いをする生徒も存在することがうかがえた。また，思考力は高いが，語彙の不足により，うまく英語で表現できず，つらい思いをした生徒もいたことが想像できた。

・ライティングテスト（１２月実施：回答数 38）

１２月の後期中間試験において，事前調査と同様に，反論および自説の理由を 80 語以上で書かせる問題を出題し，ルーブリックに基づき評価した。

論題：All Japaanese elementary school kids should learn English from AI robots at school.

評価結果：

	構成		自説の理由		反論	
	人数	%	人数	%	人数	%
A	1	2.6%	24	63.2%	26	68.4%
B	31	81.6%	9	23.7%	12	31.6%
C	6	15.8%	5	13.2%	0	0.0%

＜分析と考察＞

改善目標の 7 割には届かなかったものの，「自説の理由」が A 評価の生徒は 41.0%から 63.2%に増加し，「反論」では 25.6%から 68.4%へ大幅に増加した。生徒の反論力の伸びは，この数か月に渡る授業におけるディベート活動を聞いていても感じられる。これは，反論の型を授業で伝えた成果だと思われる。その一方で，「自説の理由」で 13.2%が C 評価にとどまった。理由としては，定期試験では時間も限られるため，反論から書き始め，自説の理由を十分に書き切れない生徒が少なからずいたことが考えられる。なお， ルーブリックの各観点，「構成」「自説の理由」「反論」の評価の向上を検定（Wilcoxon の符号付き順位検定）にかけたところ，統計学的な有意差が認められた（順に $p = 0.02$, 0.02, 0.00 < 0.05）。

教師の変化

今まで，ライティングは生徒個人が書いたものを，教師が添削して力を向上させるものと考えていた。しかし，授業にディベート活動を取り入れ，その後にライティング活動を行うことにより，教材の reading，ディベート活動による speaking，listening およびその後の意見文の writing を通して，4 技能を関連させて向上させる取組をつねに計画，実行するようになった。

今後の課題（次の改善点など）

ディベート活動を「楽しい」と言う生徒がいる一方で，語彙力が足りずに「言いたいことが言えない」「相手の言うことが理解できない」と訴える生徒がいる。2 学年のこの数か月間で生徒の表現力の差が大きくなったと感じている。協働的な学びとしてお互いの意見や経験を共有する speaking 活動を積極的に行ってきたが，この活動には，互いの英語力の差が露呈するという側面もある。今までは，生徒が退屈しない授業のレベルとスピードを意識してきたが，個人差にどのように対処するか，ずなわち，多くの生徒が楽しんで英語を学べるためにどのような支援をするか，が次の課題であると感じている。

まとめ・感想

今回の取組を通して，生徒の課題を把握した上で授業計画を立てる大切さを学んだ。またこの取組の中間期である 9 月末に GTEC for Students のアセスメント版を生徒が受験し，このクラスの writing の平均レベルが，CEFR 換算で B1.1 となったことは大きな励みとなった。最後にこの研修の機会を与えていただいたこと，リサーチに協力してくれた生徒，ご協力いただいた英語科の先生方に深く感謝申し上げたい。

授業改善にあたって参考にした資料等

小林良裕(編著).(2018).『高校生のための初めての英語ディベート: A New Introduction to Debating in English: Book 1』エスエイディワークス.

中川智皓. (2017).『授業でできる即興型英語ディベート』ネリーズ出版

田畑光義・松井孝志.(2016).『パラグラフ・ライティング指導入門』大修館書店

Newman, B and Woolgar, B. (Eds.). (2014). *Pros and Cons: A Debater's Handbook 19th edition.* New York: Routledge.

令和元年度　英語教育アドヴァンスト研修　担当講師（50 音順）

江原　美明（えはら　よしあき）

グエン，トアー（NGUYEN, Thoa）

パリセ，ピーター（PARISE, Peter）

村越　亮治（むらこし　りょうじ）

令和元年度 英語教育アドヴァンスト研修
授業改善プロジェクト 報告書
－アクション・リサーチによる高等学校英語授業での実践研究－

発行日　令和 2 年 3 月 31 日
編　集　神奈川県立国際言語文化アカデミア
（担当）村越 亮治　江原 美明
発　行　神奈川県立国際言語文化アカデミア
横浜市栄区小菅ケ谷 1 丁目 2－1
℡ 045(896)1091